

TOHOKU GAKUIN ARCHIVES

# 東北学院資料室

LIFE  
LIGHT  
LOVE

Vol. 7

2007.12.31



## シップル館(旧デフォレスト館)

アメリカの簡素なコロニアル様式の建物。東華学校の教師であるジョン・H・デフォレストが居住したことで「デフォレスト館」とも呼ばれた。後に東北学院に譲渡され、同大学理事カール・S・シップルが居住し「シップル館」と呼ばれるようになった。明治時代に建造された貴重な建物である。雨漏り防止等のため、平成19年7月25日から10月31日まで、「シップル館保存調査及び屋根修繕工事」を実施し、雄勝石のスレート屋根をカラー鉄板横葺きに替え、耐震調査、凶面の復元等を実施し建物の保存・保全を図った。

写真：屋根葺替前のシップル館



学校法人東北学院



# C O N T E N T S

ごあいさつ 東北学院長	星宮 望	1
「日本農民組合設立に向けて」	岩本 由輝	2
「弁護士時代の鈴木義男 一河上肇の弁護」	仁昌寺 正一	6
「東北学院航空工業専門学校の誕生と萱場資郎」	鶴本 勝夫	12
東北学院創立121周年記念式典		16
オープンキャンパス(土樋、泉、多賀城)		19
〃 (秋田)		21
大学祭〈工学部祭〉		22
〈泉キャンパス祭〉		23
〈六軒丁祭〉		24
学院祭		25
榴祭		26
幼稚園		27
第8回大学ホームカミングデー『同窓祭』		28
—懐かしい顔！ 懐かしい声！—		
東北学院大学文化講演会2007		31
東北学院福島県同窓会		32
2007(平成19)年度時事		33
東北学院121年沿革史		35
東北学院受贈資料一覧		41
東北学院資料室規程		42
資料室来室・利用状況		43

## 仙臺神學校

1891(明治24)年完成。初代校舎は、当時日本でも非常に珍しい本格的欧風建築様式を取り入れ、赤煉瓦造りのモダンな外観が話題を呼びました。建物は、木骨煉瓦造2階建、窓は尖塔アーチのゴシック風で、城郭意匠が加えられています(現在の東二番丁・南町通り・北西角付近)。1945(昭和20)年7月10日仙台大空襲で焼失。(写真はレプリカ。資料室に展示中)



## 「発刊にあたって」



東北学院長 星宮 望

東北学院は2008（平成20）年5月、創立122周年を迎えます。1886（明治19）年に「仙台神学校」を創設し、5年後には「東北学院」と改称し、今日の礎となりました。

さて、本東北学院資料室は、2001（平成13）年5月の創立記念日に開設され、今年で満7年を迎えます。押川方義、W.E.ホーイ、D.B.シュネーダーの三校祖の足跡を常設展示し紹介するとともに、その歴史から多くを学び、未来に引き継ごうとしております。

平成15年には「大正デモクラシーと東北学院」調査委員会が発足し、本学院に係わる二人の人物に焦点をあて、その足跡を探究し、創立120周年記念事業の一環として、2006年10月に「大正デモクラシーと東北学院—杉山元治郎と鈴木義男—」図録の刊行を果たしました。その成果は特別展示コーナーで展示しております。

また、2007年3月には中学・高等学校寄宿舎定礎式（献堂式）、ハイテク・リサーチ・センター定礎式（献堂式）、4月には榴ヶ岡高等学校体育館及び管理棟起工式を執り行い、教育施設・設備等の整備に取り組んでおります。

大学の行事としては、7月に秋田地区において県外初となるオープンキャンパスを、10月には第8回ホームカミングデー（同窓祭）を多彩なプログラムで開催しました。

この機会に、恒例の「懐かしい出会いの夕べ（記念パーティー）」を催し、多くの同窓生が集まり、和やかで心温まるひとときを持つことができました。

さらに11月には、本年度5回目となる「東北学院大学文化講演会」を福島市において開催しました。講師には、小泉武夫氏（東京農業大学応用生物科学部醸造科学科教授）をお招きし、「発酵の神秘—発酵と人類の知恵」と題したご講演をいただき好評を博しました。当日は、福島県での全県下合同の同窓会も初めて企画され、各支部間の連携を深め教職員、同窓生、また地域の方々との強い絆をもつことができました。

この他に、11月には東北学院大学と多賀城市とが連携・協力するための包括的協定を締結し、地域社会への貢献を従来以上に行っていくことを表明いたしました。

東北学院資料室は、先人たちの偉業と苦勞、そしてその心をしっかりと見つめ、先人の歴史的足跡である資料を管理・保管するとともに、資料等のデータベース化により、「見る資料室」から「提供できる資料室」へと変革を進め、先人の心に宿る東北学院の「地の塩、世の光」の精神を後世に伝えてまいりたいと思っております。

皆様方からの今後ますますのご理解とご支援をお願い申し上げます。



# 日本農民組合設立に向けて

東北学院大学経済学部教授

岩本 由輝



## 1. 杉山元治郎と小高農民高等学校

1922（大正11）年4月9日に創立大会を開いた日本農民組合の設立にあたって、その準備をすすめたのは杉山元治郎と賀川豊彦であった。杉山と賀川を結びつけたのは、沖野岩三郎であった。沖野は杉山が1904（明治37）年1月から1905（明治38）年8月にかけて在籍した日本基督教会和歌山教会の副牧師であったが、1905（明治38）年4月に明治学院神学部に入



賀川と杉山を結びつけた  
沖野岩三郎

学し、そこで賀川と同級生になる。杉山は1906（明治39）年4月に東北学院神学部別科に入学するが、とにかく杉山と賀川にとって沖野は共通の友人ということになる。もとより杉山と賀川が直接対面するのは、なおしばらく先のことである。

沖野は、1918（大正7）年11月刊行の雑誌『雄弁』第9巻第12号（大日本雄弁会）所載の「日本基督教会の新人と其事業」において、共通の友人である杉山と賀川を、当時の基督教界の期待される新人としてとりあげ、

私は極端なる程熱狂な賀川豊彦を紹介すると同時に冷静温厚な杉山元治郎を紹介したい。賀川が関西の繁華なる神戸の地に居るに引換へて杉山は東北の磐城の片田舎を住んで居る。賀川が瘦身短軀なると杉山が六尺近き長軀なると、賀川が熱烈にして激越なると杉山が温容にして冷静なると、賀川の事業が凄愴悲惨なると杉山の事業が平板無事なるとの相違はあると、其の胸中に貯へてある教界新人の血には大して径庭がない。（傍点原文）

という形で、両者の風姿・性格・事業などの対照的な状況を伝えているが、当時、賀川は神戸市で貧民救済に活躍していたのに対し、杉山は“磐城の片田舎”、すなわち福島県相馬郡小高町（現南相馬市小高区）の日本基督教会小高教会の牧師として地道な農村伝道を進めながら、「基督教主義ニ基キ精神的教養ヲ行フト同時ニ、農業上ノ实际的知識ヲ授クル」（1924〈大正3〉年10月27日、福島県知事に提出した「私立学校設立認可願」添付の明細書）ことを目的に設立された私立小高農民高等学校を主宰していたの

である。沖野は、1917（大正6）年から日本ゆにてりあん協会牧師をつとめている。

この沖野の論稿によって賀川は杉山の存在を認知したようで、1918（大正7）年1月刊行の『救済研究』第7巻第1号（救済事業研究会）所載の「日本農村の社会問題」のなかで、“農民学校の必要”を説き、

今日最も必要なことは成人及青年に、冬季の休農期に、農民学校を興して、農場化学なり、自然趣味なり、農業経済学を教授すべきであらうと思ふ。日本では杉山元治郎君が、高等農民学校を一つ興して居るだけで、その他はまだこの設立を聞かないが、農学校の様なものになると、あまり面倒臭くなるから、農民学校では、昔の私塾的の思想的結合をも頭に置いて、大に思想上の畑をも耕す積で、一生懸命に研究するが善いと思ふ。丁抹ではこの農民学校が非常に成功して居るさうであるが、私も米国で一週間の農民学校式のものに出席して見てその成績の顕著なるに驚いた。

と述べている。賀川は、高等農民学校は丁抹、すな



賀川豊彦（左）と杉山元治郎（右）  
1934年、イエス友の会にて

わちデンマークにおいて成功しているといっているが、事実、杉山は小高農民高等学校設立にあたって、デンマークのA・H・ホルマン著・那須

皓訳『国民高等学校と農民文明』（同志社、1913年1月）においてとりあげられている国民高等学校をモデルとしているのである。そして、デンマークの国民高等学校は、デンマークのルター派神学者で、詩人でもあったニコライ・フレデリック・セヴェリン・グルントヴィによって創設されたものであるが、グルントヴィについて、杉山は大阪府立農学校（現大阪府立大学農学部）時代の恩師で、のちに愛知県碧海郡安城町（現安城市）の愛知県立農林学校（現安城農林高等学校）の校長になった山崎延吉からその存在を教えられていたのである。ちなみに、杉山が小高農民学校設立について山崎に相談したとき、山崎から改めて『国民高等学校と農民文明』を読み、



グンドヴィの思想を理解することを勧められている。杉山は、小高農民高等学校の講義の内容の一部を、1915（大正4）年7月に『農村経営の理想』（洛陽堂）と題して上梓したとき、献辞として内扉に

我が愛する亡母と丁抹の偉人グンドウィッヒに  
本書を捧ぐ。

と記している。亡母とは杉山が満5歳のときに逝った生母具満であるが、杉山はグンドヴィ（Grundwig）というデンマーク語をグンドウィッヒとドイツ語読みしていることがわかる。なお、山崎が校長をつとめる農林学校のある安城町を中心とする一帯が、しばしば“日本のデンマーク”という称で呼ばれたことも知っておく必要があるが、山崎は杉山の著書に懇切な序文を寄せて、かつての教え子を、今や兄弟であるとして期待の気持を現わしている。

1919（大正8）年9月4日と8日、10月4日から11日にかけて、杉山は上京し、沖野に会っている。上京の理由は、いささか唐突にも思える歯科医術開業試験を受ける準備のためとあるが、その後、杉山は独学でこの試験を受け、1924（大正13）年12月1日には歯科医師免許証をえている。それはともかく杉山が上京して沖野に会ったとき、沖野から杉山にそろそろ小高教会を離れてもっと広い舞台で活躍するように誘いかけがあったことは確かである。1920（大正9）年に入ると、沖野との間にかなり頻繁な書信のやりとりがみられる。しかし、沖野が杉山を直接、賀川に紹介するという段取りを行なった形跡はみられない。

## 2. 杉山元治郎の上阪

ところが、杉山を広い舞台に引き出そうと考えている人物がもう一人いた。当時、大阪市で社会事業に携わっていた救世軍大校の中根峯吉がその人であるが、その中根から杉山は、1920（大正9）年2月に「例の件」で手紙を受け取っている。「例の件」としか杉山の日記には書いていないので、内容は分からないが、すでに何回か交渉があったのであろう。ただ、杉山の日記では1919（大正8）年7月4日から8月31日までと、11月27日から12月2日までと、12月17日から12月30日までの分が空白なので、これ以上の手がかりは今のところないが、何らかの誘いがあったのであろう。杉山と中根のつきあいは、1905（明治38）年9月に杉山が東北学院神学部別科に入学するために、仙台にやってきたときに始まる。杉山は日本基督教会東二番丁教会（現日本基督教団東一番丁教会）に属したが、仙台にある美以教会・浸礼教会・組合教会・救世軍仙台小隊などに属する青年たちで作っている仙台基督教青年会の人たちと交流を持っていた。1905（明治38）年は、1902（明治35）年に続く東北大凶作の年であったので、仙台基督教青年

会の人たちはその救済活動に乗り出しているが、まだ東北学院入学前の杉山もその活動に積極的に加わっている。その過程で遊郭に売られようとしている若い女性の救出に取り組んでいる救世軍仙台小隊の人たちと行動をとともにしたが、当時、救世軍大尉であった仙台小隊長の中根の身体を張って先頭に立っている姿に共感を覚え、中根が仙台を離れてからも強いつながりを持ち続けていたのである。そうはいっても、和歌山教会牧師滝本幸吉郎の勧めで新しい独逸神学を学ぶために、東北学院入学を志した杉山は、東北学院に入学後、院長ディヴィッド・ポーマン・シュネーダーらの薫陶のもと、生涯、ドイツ改革派の立場を持ち続け、救世軍に加わることはなく、また、救世軍の若い隊員で救世軍のあり方に不満を持つ者を自分の下宿に連れて来て泊め、東北学院に入学させるなど面倒をみているが、中根との交流はそれとは別のことであったようである。なお、杉山が、面倒をみた大月清次は、後年、中村清次として日本基督教団磐城平教会牧師となっている。

1920（大正9）年9月19日の杉山の日記に「中根、吉田両氏より至急大阪に来れと云ふて来る」とある。そして、杉山は小高教会を去る決意を固め、身辺整理に着手する。中根は、杉山のために大阪府東成郡生野村（現大阪市生野区）にある大阪市済生会育児部農場主任兼舎監の仕事を用意してくれたのである。杉山は、9月20日に大阪市済生会に提出する履歴書を中根経由で送っている。そして、10月4日、大阪に向うため小高町を離れている。

このように、杉山の大阪行きには中根が直接大きくかかわっているわけで、少くとも農民組合の結成云々ということはまったく出て来ない。そのとき、杉山が小高町を離れる決意をする1920（大正9）年9月に刊行された『斯民』第15編第9号（中央報徳会）所載の天野藤男『郷土文明の發揮と地方改良』において、天野が杉山の小高町における活動ぶりをとりあげ、

氏は小高町に住居する正に十年、あらゆる困苦と戦つて教会堂を設立し、此に日曜学校を設け、町民及び附近農民に教界の靈光を宣伝すると共に、地方開発の使命を力説し、冬閑期を機して、短期の講習会を開設し、地方子弟の教化に力めた。純然たる基督教宣伝者に非ずして農学校出身にして地方改良を使命とせる氏の立場に特色があると共に、教界に於ては、稍々継子扱ひされてゐるとは真か。

という形で、好意的な評価を与えるとともに、キリスト教界では浮きあがっているようにみえるところがある。

1920（大正9）年10月4日、東京に着いた杉山は、3日、東京に滞在するが、この間、沖野を訪ねて会っている。10月7日朝、夜行列車で大阪に着き、中根の出迎えを受けている。10月8日、大阪市役所に行き、



挨拶をし、大阪市済生会育児部をみに行っている。10月9日の日記は空白で、10日、中根とともに神戸と兵庫の見物に行っている。11日は中根宅で1日休み、12日に大阪市役所に行ったとき、妻ことが済生会育児部の保母になることを依頼されている。杉山は13日に妻を大阪市内に案内し、14日に箕面公園に連れて行き、15日に妻とともに育児部に着任し、農場内の清友舎に住み込みで仕事を始めている。

ここで大阪に着いてのちの杉山の日記の記述を追ったのは、杉山が、1960（昭和35）年10月刊行の農民運動史刊行会編『農民組合運動史』（日刊農業新聞社）の序文において、杉山は上阪して早速賀川を訪れ、社会運動への抱負を述べると、賀川は、

労働運動は、私がやる。君にはやつて貰いたいものがある。それは農民運動である。だが、農民運動の時期はまだ少し早い。だから暫くの間待つてあてくれ。

といったので、とりあえず大阪市済生会育児部に仕事を求めたようないい方をしている。しかし、事實は、すでにみたように、その仕事は中根があらかじめ上阪する杉山のために用意してくれていたものであり、少くとも賀川に少し待つようにいわれて急に育児部への就職を決めたわけではない。それと賀川との接触が杉山の日記からは確認できない。大阪に出てくる以前にも、日記に賀川との書信のやりとりについての記録はない。大阪に着いた翌日の10月8日、大阪市役所に挨拶に行き、その翌日の10日に中根の案内で神戸と兵庫に行っているが、賀川に接触した形跡はみられない。もし賀川に会っているとすれば、神戸と兵庫に行ったとある前日の9日であるが、この日の日記は空白である。

### 3. 日本農民組合設立への始動

杉山の日記で、杉山と賀川の出会いが明記されているのは、1921（大正10）年2月20日のことである。この日、「賀川氏より待ち居るとの手紙」が来ていたので、午後に「賀川氏訪問」とある。杉山の日記における賀川豊彦の名前の初見であるが、

二時間ばかり社会事業并二農民学校の件に関し語り会ひ、貧民街の案内をうけ、夕方帰宅す。

賀川君が貧民の凡ての名を知れること、貧民だけが丁寧におじぎすること、子供等の馴れ居ることには感心した。実に貧しきもの友であり、救主である。全日実によき聖日であつた。

と、賀川に会った感銘を書きつけている。どうも、この日が杉山と賀川の初対面の日のように私には思える。このあと、杉山と賀川との間で書信のやりとりがみられるようになり、杉山が賀川の説教が行なわれる教会に赴き、また賀川の使いが杉山の勤務先を訪れるなど、交流が深まっている。

この間、大阪市済生会育児部の仕事をするように

なった杉山は、1921（大正9）年11月13日に大阪府知事官舎で開かれた救済事業研究会に出席するが、以後、この研究会の定例の会合にはほとんど欠かさず顔を出している。また、12月8日の日記には、

夜は大原社会事業研究所の救済策の講習会員に許され、聴講生となる。

とあるが、育児部にもよく出入りしていた暉峻義等の誘いがあったのであろう。大原社会問題研究所は現法政大学大原社会問題研究所の前身であるが、当時、大阪市天王寺区怜人町にあった。こうして救済事業研究会に加えて大原社会問題研究所に行くことで、杉山の社会問題研究の機会が増えたことは間違いない。大原社会問題研究所には聴講生として決められた定例の会合のみならず、暉峻との縁で折に触れて顔を出しているし、暉峻もよく相談に応じてくれている。

このようななかで、1921（大正10）年6月に入ると、賀川は神戸の川崎造船所と三菱造船所で起きた争議の実行委員となり、7月18日、両争議が激化したとき、争議戦術として工場管理を行なうことを明らかにするが、7月29日、川崎争議団13,000人が賀川を先頭に示威運動を行ない、負傷者が出て、その夜、賀川は争議団幹部の1人として拘束され、8月10日に証拠不十分として釈放されるまで留置場にいれられていたということがあった。また、賀川は、7月20日から28日まで福島県相馬郡八沢村（現南相馬市鹿島区）の八沢浦干拓地に行っている。ここは杉山が小高教会牧師時代にいろいろかかわりを持ち、干拓地の入植者を中心に八沢浦伝道教会を組織したところであったが、そこで生じていた地主と小作農間の小作料率をめぐる紛争を地主側と小作農側の双方から懇請されて調停に出かけたものである。調停は7月23日から25日にかけて行なわれ、「漸く解決」しているが、杉山は地主が地主根性を丸出しにするようになったと、腹を立てている。地主も小作農も杉山からみれば、よく知った人たちであったのである。

8月14日、杉山は釈放されて間もない賀川を訪れ、「半日を快談」しているが、日本農民組合づくりが話し合われたのではなからうか。そのさい、10月25日から11月12日にかけて開催される予定の第3回ILO（国際労働機構）総会において、農業労働問題がとりあげられ、“農業に従事するもの”としての農業労働者にも“結社の自由と権利の確保”を認めようとする国際的な動きがあることに大きな刺激を受けていることは間違いのないところである。杉山は9月18日の日記に「賀川君より規則及手紙来る」とあり、同日中に賀川に「規則及手紙を出す」とあるのは、日本農民組合の規約草案が賀川から杉山に送られて来て、杉山がそれをみて、意見をつけるなどして送り



返したのであろう。そして、10月8日、杉山は大阪府知事公舎で開かれた救済事業研究会の例会において「農業労働者に就て」という講演を行なっているが、それは杉山の日本農民組合設立のための決意を示すものであった。その論旨の特徴は、農村における地主と小作農との関係の実態に触れ、小作農が地主に人格的な従属を強いられている事実を明らかにしたうえで、

如何に都会でデモクラシーの何の彼と申しまして  
も農業労働者がこんなことでは駄目であります。国民  
一致協力歩調を一にせねばなりません。私は先覚  
せる諸君に、私共の仲間には斯くの如く遅れてゐる、  
<sup>(マ)</sup>虚されてゐることを申上げて是非御協力を願いたい  
と思ふのであります。

と述べ、折からの大正デモクラシーの風潮が都会に留まり、農村に及ばぬことを批判していることと、1917（大正6）年のロシア革命における土地国有論に言及し、

一部社会主義者、共産主義者の間に称へられてゐるが、今日の如き経済意識の下では六ヶ敷、レーニンの主義は失敗したから失敗するものと認めておかう。と論じ、ウラジミール・イリッチ・レーニンが行なった土地政策を失敗とみなしていることにある。

その後、杉山は賀川と連絡をとりながら、日本農民組合設立の準備を進め、12月8日の日記に、

神戸に行き、賀川家を訪ね、日本農民組合設立の約束をなして、夕方帰宅。これは日本に於て意義のある日でありたいものである。

と書くにいたっている。このことを杉山は大阪毎日新聞社の記者村島婦之に話したところ、村島は、12月12日の『大阪毎日新聞』に、「日本農民組合生る」という見出しで、

瑞西における農業労働会議の結果は必然全国に亘る農業労働組合の誕生を必要としてゐるが、現在に於ては未だ之に該当するもの一もなく只地方的又は争議の時一時的集団を作るに止る現状であるに鑑み伯爵有馬頼寧氏、賀川豊彦氏、杉山元治郎氏発起となり近く日本農民組合を創立する事となつた。尤も此種組合は今回が最初であるため先づ之を全国に宣伝する必要あり、杉山氏が農学校の出身で嘗て東北に於て農民学校を起した経験があるので先づ手初めとして東北地方に於て将来農民組合の幹部たるべき農夫養成のため簡易なる農民組合を起し徐々に宣伝して行く事となり尚一面神戸から「土地と自由」と題する機関雑誌及び農業労働に関する小冊子を発行する計画である。又同時に農業労働争議に対する仲裁機関をも設くる予定だ。

という記事を載せている。「瑞西における農業労働会議の結果」というのは、ジュネーブで開かれた第3回ILO総会において「農業労働者ノ結社及組合ノ権利ニ関スル条約」が賛成92、反対5、棄権2で可決採択されたことをさしている。ちなみに日本代表の投票行動は、労働代表は賛成であったが、使用者代表は反

対、政府代表は棄権というぶざまきわまりないものであった。また、機関誌の題名が「土地と自由」と、この時点で決まっていたようであるが、これはロシア革命のスローガンの英訳“Land and Freedom”に由来するものである。レーニンの主義はとらないといいいながら、その掲げたスローガンの1つは採用されたのである。なお、この記事を書いた村島は日本農民組合の初代理事の一人となる。

この『大阪毎日新聞』の記事を追うように、12月14日の「大阪朝日新聞」には、「日本農民組合 賀川杉山両氏が発起」という見出しで、

賀川豊彦、杉山元治郎両氏が主たる発起人となつて日本農民組合を組織する事となつた。此組合は近時漸く覚醒しつゝある地方農民の為に文化及技術の向上を図り多くの理想農村を現出することを主旨とするもので事業の内容は左の通りである。

一、出版、一、調査（争議、生計、労働事情）、  
一、宣伝（出版、演説、応援）、一、農民学校の経営、  
一、産業組合経営（種子、農具等）、一、法律相談所、  
一、農民芸術の助成、一、副業の指導、一、其他農民の福利に必要な一切の事業

右の中農民学校は冬期農閑中講習会を開くもので科目は農業園芸を主とし講師は既に人選及交渉を了つてゐる。又組合の事業として大阪府下に一大園芸場を経営する予定で目下賀川氏が候補地を物色中である、尚機関雑誌「土地と自由」を来年一月から神戸新生田川の賀川氏宅から発行する事となつてゐる。という記事が載せられている。

これら記事が載ると、杉山の身边はにわかに慌しくなってくる。

そこで1922（大正11）年1月3日に杉山は大阪市済生会に対して、「農民組合が多忙のことを話し、辞職のことを願い出」て、「四月より辞職のこと」の了解をえている。そして、1月5日、賀川宅に行ったときのことについて、

俸給其他として金壹千円也を受取つた。賀川は此の新しき事業のために努力の結果たる金を投じてくれることを思はゞ、此方も大に勉めねばならぬ。

と日記に書いている。賀川が提供した「努力の結果」の1,000円というのは印税収入をさしているようであるが、これで日本農民組合設立の動きは軌道に乗つたのである。機関誌『土地と自由』の創刊号は1月27日に刊行されている。

岩本 由輝プロフィール IWAMOTO, Yoshiteru

1937（昭和12）年生まれ  
東北大学経済学部卒業  
山形大学人文学部講師・助教授・教授を経て  
東北学院大学経済学部教授となる

訂正

昨年発行の年報vol.6中の9頁右の15行目

“Russian Revolution……”は、“Russian Peasant……”に訂正  
します。

東北学院資料室



# 弁護士時代の鈴木義男

## — 河上肇の弁護 —

東北学院大学経済学部 教授

仁昌寺 正一



### 1. 弁護士鈴木義男の基本姿勢と 河上肇の弁護

東北帝国大学教授辞任後の1930（昭和5）年5月に弁護士に転じた鈴木義男は、治安維持法違反事件被告の弁護を積極的に引き受けている。鈴木が弁護を行った人達は、今日わかっているだけでも、マルキシズム関係者からキリスト教関係者まで極めて広範囲に及んでいる。その中には、河上肇、山川均、大塚金之助、山田盛太郎、平野義太郎、大内兵衛、有澤廣巳、脇村義太郎、美濃部亮吉、宇野弘蔵、鈴木茂三郎、和田博雄、宮本百合子といった日本近代史にその名を刻んでいるそうそうたる人物も含まれている。これらの弁護に関して特筆しておかなければならないのは、鈴木自身が、「私はこれら大部分の事件には弁護を引き受けていたのであるが、しばしば弁護するそのことが、累を受けるであろうという警告を警察当局から受けていた」（『日本評論』1950年8月号、118ページ）と述べているように、鈴木にとって「命懸け」の仕事であったことである。それにもかかわらず、この種の事件の弁護を次々に引き受けていったのはなぜであろうか。この点に関して、鈴木のある知人は、

人間尊重——これが先生（鈴木義男）の生涯を貫くバックボーンだったのではないのでしょうか。河上肇博士およびその令嬢、平野義太郎教授、その他多数の思想（治安維持法違反）の人々の弁護。当時この人々の弁護を引受けるのは、布施辰治氏外の自由法曹団の人々だけでした。他の弁護士達は、サワらぬ神に崇りなしというのか、依頼を受けることを喜ばなかったようです。しかし、先生は何の臆するところもなく当時の危険人物達の弁護を引受けられました。思想信条の成否は別として、社会や人類のために一身を犠牲にするつもりの良心的な人々を見捨てるのに忍びなかったのだらうと思います。（鈴木義男伝記刊行会編『鈴木義男』、1964（昭和39）年12月、274-275ページ）

と述べている。鈴木の行動が、限りない慈愛に満ちた人間性に裏付けられたものにほかならなかったといえる。そのようなヒューマンな姿勢は、臨終の際

して「『私はキリスト教の精神を子供の頃から身につけたために大分損をしたよ』と行って心からうれしそうに微笑んだ」（前掲『鈴木義男』、264ページ）という話からも窺われるように、幼少の頃から身につけたキリスト教的人道主義とも無縁ではなかったように思われる。

さて、鈴木が行った一連の治安維持法違反事件被告の弁護の中でも、河上肇の弁護は特別に重要な意味を持つものであった。当時の日本において河上が最大級の知名度を持つ学者であったことから、その裁判への社会的関心も極めて大きかったのである。河上肇は「日本におけるマルクス主義経済学の先駆者」（『日本近現代人物辞典』）であり、『貧乏物語』や『資本論入門』をはじめ、多数の著書を執筆している。1928（昭和3）年4月に文部省から「左傾教授」として辞職勧告を受けて京都帝国大学教授を辞して以降、実践運動に深く介入していった。事件のあらまは、「昭和六年六月から共産党に資金援助を行い、翌一九三二年六月『三十二年テーゼ』を翻訳提供、八月地下に潜入、九月には正式に共産党に入党した。しかし、十月からいわゆる新生共産党大検挙が始まり、翌一九三三年一月に検挙された。同年八月、治安維持法違反として公判に付され、第一審で懲役五年の判決を受け、刑に服した」（『日本政治裁判史録 昭和・前』、551ページ）というものである。

ここでは、この事件に鈴木義男がどのようなかたちで関わっていたかを、主として河上肇の『自叙伝』を利用しつつ、明確にしてみたい。なお、以下では、『自叙伝』からの引用を多くするが、その場合、煩雑さを避けるため著者名（河上肇）と出版社名（岩波書店）の記述は省略する。

### 2. 鈴木義男が河上肇の弁護を 行うようになった経緯

まず、鈴木義男が河上肇の弁護を行うまでの経緯に注目してみたい。というのも、この経緯は、河上



肇を取り巻く人々の思惑が複雑に絡み合い、紆余曲折を経たからである。

河上は当初、「弁護の如何によって自分の刑が軽くなる望みがあるなどとは、到底考えられなかったから」、「名ばかりの弁護士一人だけ付けてもらえばいい」と考えて、「新労農党時代からの友人である上村進君に弁護を頼もうと思った」と述べている（『自叙伝（三）』、80ページ）。このような河上の意向を確かめた妻の秀は、上村進の事務所を訪れ弁護を依頼し、上村は即座に快諾した。ところが、秀が自宅に戻ると次のような展開となった。

安心して帰って見ると、留守宅では山田盛太郎君などが待っていて、弁護士は上村ではいけない、是非鈴木義男にしろということであった。この鈴木弁護士というのは、以前東北帝国大学の教授をしていた人で、平野義太郎君や山田盛太郎君などが検挙された時も、その弁護を引受け執行猶予を勝ち取った先例もあり、裁判所方面の受けも良い弁護士だから、もし上村を断る訳には行かなければ、少なくとも弁護士は上村と鈴木の二人にせねばならぬ。そういう忠告であった。（『自叙伝（三）』、81ページ）

ここではじめて、鈴木義男の名前が登場する。ちなみに、山田盛太郎とは、『日本資本主義分析』を執筆しているいわゆる講座派の代表的論客である。東京帝国大学助教授であったが、1930（昭和5）年5月、共産党シンパ事件で取り調べを受け同大を辞職、7月に起訴された。この事件について山田は、1932年に懲役2年、執行猶予3年の判決が下されている（寺出道雄著『評伝 日本の経済思想 山田盛太郎』、日本経済評論社、2008年1月）。この裁判の弁護を行ったのが鈴木義男であった。山田は、執行猶予付きの比較的軽い判決をもたらした鈴木の能力や手腕を高く評価しており、それゆえ河上肇の弁護も鈴木が担当することを強く望んだのであった。

ところが、そのようななか、「赤色弁護団の若手連中」が「大々的に法廷闘争を展開せねばならぬ」と強硬に主張しているという話が持ち込まれた。この「赤色弁護団」（「自由法曹団」）は、1928年の3・15事件、翌年の4・16事件での多数の被告の公判において「法廷闘争」を展開しており、河上の裁判もこの闘争の絶好の機会と位置付けていたのである。そこで、上村のほかにもう一人左翼弁護士を加えねばならないという方向に進んでいき、神道寛治の名前があがってきた。河上は、弁護士を、鈴木義男、上村進、神道寛治の3人にする決心をした。そこで秀が神道を訪れ弁護を依頼したところ、「幸にして彼も機嫌よく承諾した」という。しかしながら、自宅に戻ると、

またしても山田盛太郎が、平野義太郎（マルクス主義研究者で、山田盛太郎と同じく、1930年に共産党シンパ事件で東京帝国大学助教授を辞職）、安田徳太郎（山本宣治の甥で医学博士）を伴ってやってきて、次のように主張した。

赤色弁護団の意向などは毫も顧慮する必要はない。この際は先生が一日も早く自由を得られることこそが、学界のためマルクス主義のため最も肝要なことなのだから、詰らないことで無益に裁判所の心証を害するのは、極めて不得策である、神道はぜひとも断れ、上村もなるべく断るといいのだが、行掛かり上致方がなければ、鈴木弁護士の方を主にして、上村の方は従にするがよい、たとい赤色弁護団がどんなに怒ったとて差支えないから、至急右の手配をして、先生の諒解をも得て来いと、こういう話であった。（『自叙伝（三）』、82ページ）

ここまで強弁されると河上も反対できなくなり、すぐさま秀を通じて神道寛治を断った。かくして鈴木と上村で弁護することに決定し、秀が、同年5月18日に鈴木に依頼すべく自宅を訪問したところ、

鈴木弁護士の方はもとより問題はなかった。秀子が頼みに行ってみると、自分の方から進んで弁護に立ちたいと思っていた位だといって、即座に快諾した。（『自叙伝（三）』、83ページ）

という。こうして、鈴木義男は、河上肇の弁護を担当することになったのである。

### 3. 執行猶予が付くと予想

次に、河上肇の罪状に対する鈴木の予想に注目してみたい。結果的には、この予想は大きくはずれることになる。

鈴木は、弁護を引き受けた当初から、河上の罪はそれほど重いものではないと考えていた。例えば、河上肇の『自叙伝』と河上秀の『留守日記』によれば、鈴木義男は、1933（昭和8）年5月26日、豊多摩刑務所で河上肇に面会し、その帰りには河上家へ立ち寄り秀と会っているが、このとき2人に対して、河上に執行猶予が付けられるとの予想を口にしている。そのことについて、『自叙伝』では、

五月二十六日に鈴木弁護士が来た。その時彼は私に次の意味のことを語った。事件は極めて簡単だから、自分は執行猶予に漕ぎ付けて見せる積りである。保釈は駄目だろうと思うが、ともかく自分が引受人になって、その方の願書も出してみる。もし保釈が許可されぬようだったら、裁判はかえって都合の好い結果になるかも知れない。どうせ執行猶予にして間もなく出すのだから、それまで苦めて置け、というような考慮も働き得るものである。（『自叙伝（三）』、84ページ）

と記述されている。



鈴木は、河上に対して、治安維持法第一条第一項の後段が適用されることを信じて疑わなかったのである。周知のように、治安維持法第一条第一項の前段では「結社ノ役員其他指導者タル任務ニ従事シタル者ハ死刑又ハ無期若ハ五年以上ノ懲役若ハ禁固ニ処シ」とされ、後段では「情ヲ知りテ結社ニ加入シタル者又ハ結社ノ目的遂行ノ為ニスル行為ヲ為シタル者ハ二年以上ノ有期ノ懲役又ハ禁固ニ処ス」とされており、前段と後段では量刑に極めて大きな差があった。もし執行猶予が付くとすれば後段であり、刑期では懲役2年以下になるとみなされていた。

鈴木はこの予想は、河上と同じ日に治安維持法違反容疑で検挙され、やはり鈴木義男が弁護を行っていた大塚金之助（東京高等商業学校教授〔現・一橋大学教授〕）の裁判が進む中で、さらに確固たるものとなっていった。このことについて、河上肇の『自叙伝』では、

秀子が話したところによると、同氏の公判は七月十五日に行われ、検事は四年の求刑をしたとのこと。その日、同氏のためにも弁護を引受けていた鈴木弁護士は、公判廷からの帰路を秀子の所に立寄って、「大塚さんの方は、都合よく執行猶予になるかどうか心配しているが、先生の場合は、大塚さんより譲歩の度合いが遙に大きいから、私は大丈夫執行猶予になるものと期待しています」と語ったとのこと。（『自叙伝（三）』、161ページ）

と記述されている。この中での「譲歩の度合いが遙に大きい」というのは、河上が発表した「獄中独語」のことを指していることは間違いない。それは、今後は実践運動から身を引くことを宣言したものであった。ちなみに、「転向声明」ともいわれたこの文書の作成は、河上に執行猶予を期待させるかのように検事戸沢重雄の巧みな誘導によってなされたものであったという。そのようなことがあったことで、鈴木は、大塚よりも河上の方が執行猶予が付く可能性が高いと考えていたのである。

#### 4. 検事の求刑・一審判決と 鈴木義男の対応

東京地方裁判所での公判は1933年8月1日に行われた。約100席あったといわれる傍聴席は、「曾て博士の教えを受けた人々や男女学生等の青白きインテリに依って占められている」と新聞で報じられた（『河北新報』1933年8月2日）。このときの検事の求刑は、治安維持法第一条第一項の前段の規定を採用したものであり、懲役7年という重いものであった。これは、上の如き期待を完全に裏切るものであった。この求

刑に対しては、『留守日記』1933年8月5日の欄には、政策上から刑を科し、法律的には何の根拠もない、いままでの社会的存在が大きな損になっている、というのが、昨日鈴木弁護士のお話だった由（48-49ページ）

と記述されている。やはり鈴木の言う通りであり、河上が当時のスーパースターの一人であったが故に、その影響力の大きさを計算した上での政治的判断であった。

やがて鈴木弁護士の弁論が行われた。『自叙伝』によれば、このときの弁論に対して、河上は、

私は自分のような罪状の明白な者の弁護がどうして出来るだろうかと思っていたが、さすがは東北大学の刑法教授（行政法教授の誤り……仁昌寺）までしたことがあるだけに、鈴木弁護士の弁論はドイツの刑法学者の新しい学説などを引用して主力を法理論で固め、ただお情に縋るといふ風なものではなかった。親しく傍聴していた左京（河上肇の実弟……仁昌寺）は、あとで秀子への報告に、「鈴木弁護士の弁論は実に立派だった。あれなら兄さんも満足だったでしょう。」と語ったほどである。（『自叙伝（三）』、172ページ）

と記述している。この法廷での出来事は、河上やその周辺の人々が鈴木に対する認識を新たにされたものであったといえよう。なお、このとき、秀は、人目を避けるため傍聴席にはおらず弁護士会館で待っていたという。

そして一週間後の1933（昭和8）年8月8日、第一審の判決が下った。その「主文」は、

被告人を懲役五年に処す  
訴訟費用は全部被告人の負担とす

とされ、以下、その「理由」が述べられた。それによれば、河上は「日本共産党がコミンテルンの日本支部にして革命的手段に依り我国体を変革し且私有財産制度を否認しプロレタリアートの独裁を樹立し之を通じて共産主義社会の実現を目的とする秘密結社なることを知りながら同党を支持し之が目的の達成を図らんことを企て」、①「32年テーゼ」の翻訳、②共産党への入党、③共産党への資金提供、④共産党へのリットン報告書批判文などの提供という行為を行ったとされた（この判決文は、我妻榮・林茂・辻清明・団藤重光編『日本政治裁判史録 昭和・前』、第一法規、1970年3月、576-578ページ）。

さて、以上の求刑や判決に対して、鈴木義男はどのように考えていたのであろうか。この点に関して、鈴木は、「河上博士の一審弁護人として」（『法律新聞』3595号、1933〔昭和8〕年9月3日、後に天野敬太郎・野口務編『河上肇の人間像』、図書新聞社、1968〔昭和43〕年6月、所収）という一文において胸中を吐露



しているように思われる。その中から、私なりにという限定詞づきで、鈴木の本張の要点を抜き出してみることにする。

まず、鈴木は、河上肇とはどういう人間であるかについて言及する。すなわち、自分の見るかぎりでは、河上の思想と行動の根幹を為すものは人道主義である。そこに河上の戦闘に徹しえない所があり、それ故にこそ河上には弱さと美しさがあり、苟くも彼を知る者にとっては、愛し慈しむ心こそ起これ、決して憎む心の起こりえない所以である。河上に対しては、一部の人は「獄中独語」のような声明を发表して共産党離脱・書斎還元を言うくらいなら、最初から身上を顧慮すべきではなかったかと批評するが、理想主義の青年を大きくしたような純情な彼にそれを言うことは無理である。彼が地下運動等に従事しえないことは識者を俟たずとも明らかであるが、彼自身は、やってみなければわからなかったと告白している。河上肇という人はそういう人である。

また、鈴木は、このような性格の河上が「自己の専攻する経済学的立場から我国現下の経済組織をみたときに到底これではならぬとひたすら感じた」ところの改革運動に言及する。それは、「土地と自由」という標語の経済改革運動であった。河上の言うところでは、「土地」についていえば、日本の農民は明治政府により完全なる土地所有権を与えられた代わりに、むしろ地租を通じて土地の収奪を受けたということ、寄生地主は明治政府によって手厚い権力的保護を受け、小作料を通じて農民に対する封建的搾取を維持しえたこと、これらのことは明治維新の革命が、農業革命を遂行せずに日本の農村における農奴制的搾取をそのままにしたということの意味する。今日の農村問題の困難はここに胚胎している。他方、「自由」については、日本の国民は一般に政治的自由をもたない。市民的自由である売買の自由、結婚の自由等はあるが、政治的自由である集会・結社・出版・言論等の自由に至っては甚だしき制限を受けている。その意味において明治維新の革命は、国民に政治的自由をもたらさなかったものであり、憲法発布、議会の開設等があったにもかかわらず、実際においては封建的専制主義がまだ広く行われているのである。このように、日本では農民が完全な土地所有者となることができず、一般国民が政治的自由を持つことができないという意味で、今日もなお多量に封建的遺制が残存しているということが出来る。そして、このような点を共産党が指摘しているのは正し

い。鈴木は、河上の行おうとした運動をこのように紹介している。

その上で、鈴木は、河上の行為が、治安維持法に照らしてみても重罪ではないことに言及する。その論法は次のようである。重刑をもって臨む治安維持法上の罪を構成するためには、被告が、ある組織に「国体変革」を目的とするという項目があるということを知っていたということだけでは十分ではない。河上も、共産党のスローガンの中にそのような一項目があることは知っていた。しかし、河上はその目的を如何なる手段・方法を通じて達するかについては全然知らなかったと述べている。このような者に対して、何らの斟酌もなく、治安維持法第一条第一項を適用することは疑問である。しかも、河上の行為は、党加入行為を除くと目的遂行行為ではなく、三つともその幫助にすぎない。すなわち前述の①の翻訳提供も、③の資金提供も、④のパンフレット提供も目的遂行行為はほかにあったのであって、河上の行為はそれを側面支援したものにすぎない。具体的には、翻訳は大塚有章の依頼により、大塚が利用するために提供したものであり、資金に至っては大塚の独断にて持ち行かれたるものである。かくて、さまざまな角度からみても、河上には重罪を科すべき特別の理由が見当たらない。これが鈴木の本張である。

## 5. 控訴取り下げ・服役・出獄

それゆえ鈴木は、先の判決には不服であり、当然の如く控訴すべきだと考えていた。山田盛太郎も、秀に対して「控訴で重くなることは絶対にないと思う。やはり控訴はすべきだ」（『留守日記』8月13日の欄、53ページ）という立場であった。かくて河上も、鈴木の勧めで控訴の手続きをとった。しかしながら、河上はたまたま刑務所の看取部長から、近く恩給法が改正されて懲役2年以上の刑を受ければ恩給がもらえなくなるという話を聞き、控訴取り下げを決心した。そのくだりは次のようである。

恩給のことなどで進退を左右させてはならぬとの考慮から、他人から注意されながらも、秀子はわざと私にその事を話さずにいたのである。しかし看取部長からその事を聞き知った私は、それにより独りで最後の決心をすることが出来た。そういう事ならしかたがた問題はない、いよいよ控訴は取り下げてしまおうと、そう思い定めたのである。そして秀子や鈴木弁護士などとも一応の話をした末、九月十五日にいよいよ控訴取り下げの手続きを取った。かくて法規の定むる所により、この日から私の刑期は計

算されることになった。即ち昭和八年九月十五日、この日を出発点として、私は向う五ヶ年、前途一千八百二十五日に亙る長途の旅に立ったのである。『自叙伝(三)』、180-181ページ)

かくて鈴木は、最終的には河上のこの意向に従うことになる。『留守日記』の9月15日の欄には、「夕刻、鈴木弁護士から速達。控訴取下げを提議され、即日取下げの手続きをとられる由」(71ページ)と記されており、控訴は取り下げられたのである。

この後、秀の『留守日記』には、「河上事件」での鈴木義男に関する記述は少なくなる。それに代わって、今度は「大森銀行ギャング事件」での大塚有章の弁護の関する記述が多くなっていく。この事件は、1932年10月7日、共産党の活動資金の調達のために、第百銀行大森支店が襲われ3万円が奪われた事件であるが、その責任者が河上秀の実弟である大塚有章であった。このことについては、河上秀の『留守日記』の1933(昭和8)年11月10日の欄に、「鈴木弁護士を訪問、有章さんのことについて相談する」(96ページ)と記述されており、このあたりから鈴木がこの事件にコミットしていることがわかる。やがて、同書の1934(昭和9)年4月14日の欄に「鈴木弁護士よりお手紙あり。有章さんの弁護をご自分で引きうけて下さる由」(130ページ)ということになり、1934年10月12日には、鈴木義男の弁論が行われた。その弁論に対して、傍聴していた秀は「鈴木氏のご弁論はよく情理をつくされ、各方面から当人の心持ちを説明してくださった」(154ページ)と言い、当の大塚有章も「自分の言いたいところを十分に言い尽くしてもらって満足している」(155ページ)と言ったという。

また、『留守日記』には、この頃から、鈴木が河上肇の次女・芳子に対する裁判上の支援も行っていることが散見される。芳子は「大森銀行ギャング事件」で、叔父である大塚有章が奪った金の運搬を手伝ったことで検挙された。これに関しては、『留守日記』の1933年の10月30日の欄には、「午後、鈴木弁護士豊多摩のお帰りとて寄って下さる。一時間ばかり話して帰られる。……芳子の身の上に関していろいろな考えているとお話あり」(93ページ)とあり、鈴木が芳子のことについて親身に対応している様子が窺われる。こうした甲斐あって、芳子はついに起訴されなかった。

さて、この間、河上は、1934(昭和9)年2月には大赦による刑期4分の1の減刑措置を受けている。『自叙伝』には、「二月二十六日には、弁護士の鈴木が減

刑の喜びを述べに刑務所まで面会に来た」(『自叙伝(三)』、123ページ)とある。

そして、ついに1937(昭和12)年6月16日午前0時、未決以来4年9カ月の刑期を終えて、小菅刑務所を出所することになった。河上は、出所時の様子を次のように綴っている。なお、以下に出てくる「弘蔵」とは河上肇のことであり、「重子」は秀のことである。ここは小説風に書いている。

着物を着替えてから独りで待っている三十分足らずの時間は、弘蔵にとって恐ろしく長いものであった。

戒護事務室付属の小さな接見室で独り待っていた弘蔵は、その十二時の時計の音とともに椅子を離れた。が誰もまだ顔を出す者はなかった。

約十分ばかり経て、弘蔵はやっと隣りの戒護事務室へ招かれた。入って見ると、そこには和服姿の弁護士の鈴木が来ていた。

「お目出とうございますと申し上げてよろしかろうと思います。」

と言って、彼は弘蔵と握手した。

「多勢の新聞記者が正門に詰めかけて来ていますから、私はいい加減のことをいって、その連中を釣っていますから、その暇に素早く裏門から出してもらって帰って下さい。お宅までお送りするのですが、そういう訳で、私はこれで失礼しますから。」

彼はそんなことを言って、弘蔵と別れた。

それから弘蔵は、当番の看守部長と今一人背の高い若い看守とに、提灯で案内されながら、薄暗い炊場の側を通り抜け、交換場と称されている所の脇門から、高塚の外へ吐き出された。すぐ近所の刑務所関係の倶楽部にはいると、そこでは重子と武雄と都築とが弘蔵の帽子を持って待っていた。教務主任も、弘蔵がよく世話になった薬剤師も、彼を見送るために遣って来た。

弘蔵たちは、正門の方に来ているという新聞記者たちを鈴木に操ってもらっている隙に、暗闇の中をコソコソと、待たせてあった一台の自動車に同乗し、警察から来た監視の自動車に後を追われながら、深夜の東京を、東の果から、西の果まで、杉並区天沼の仮寓を指して、一路西へ西へと走らせた。(『自叙伝(四)』、344ページ)

河上肇の『自叙伝』での鈴木義男に関する記述は、これで終わっている。また、80数箇所にも及んだ『留守日記』での鈴木義男に関する記述も、この6月16日の欄の「弁護士さんもそこでひとまずお別れする」(367ページ)という記述が最後になっている。

なお、それから1か月後の1937年6月12日に、河上は、お礼のために鈴木義男を訪問している(河上肇『晩年の生活記録——出獄後(昭和十二年)～昭和十七年——』、第一書林、1958年2月、10ページ)。



## 6. おわりに

以上、弁護士鈴木義男が「河上肇事件」にどのように関わってきたかを一通りみてきたが、最後に、今後さらに深く検討するために必要と思われることを二つ述べておきたい。

一つは、鈴木木のこの事件への関わり方の全貌を知るためには、鈴木木の河上肇本人に対する弁護のことはもちろんとして、周辺への対応もよくみておく必要があるということである。例えば、前述のように河上秀の『留守日記』には、鈴木義男に関する記述箇所が記述が80箇所以上もあり、夫の裁判に戸惑う秀の相談相手になっていることがわかる。また、「大森銀行ギャング事件」の首謀者の一人であった、秀の実弟・大塚有章の弁護も行っている。さらに、大塚有章の手助けを行った河上肇の次女・芳子が起訴されないように尽力している。このようにみれば、鈴木義男の果たした役割は、いうならば河上ファミリーとの関わりの中で考えてみる必要があるように思われる。

もう一つは、河上肇と同じ日に検挙された大塚金之助（東京高等商業学校〔現・一橋大学〕教授）に対する弁護も十分検討する必要があるということである。例えば、『大塚金之助著作集』第10巻（岩波書店、1981年11月）には、鈴木木のことに言及している箇所が多くあり、しかも「鈴木弁護士の弁護は、実に私にとってこの上もない適切な弁護でした」（245ページ）といった評価もなされている。それだけに、これについても、やはり今後立ち入った検討・考察がなされるべきである。

さて、鈴木が行った弁護士活動の歴史的意義の大きさを考えるとき、それに関する調査・研究がこれまでほとんどなされてこなかったことに奇異の念を抱くのは私だけであろうか。幸い、少しずつではあるが、鈴木が残した弁護記録（例えば東京大学社会科学研究所所蔵の『河上肇弁護弁論要旨 弁護士鈴木義男』もその一つ）が見つかるなど新しい動きも出てきており、今後の研究の進展の可能性は広がっている。

このような次第で、「弁護士時代の鈴木義男」に関する私の調査・研究はまだ続く。

※本稿は、『大正デモクラシーと東北学院—杉山元治郎と鈴木義男—』（学校法人東北学院、2006年10月）の中の河上肇に関する記述部分（26—28ページ）を補足・敷衍したものである。

## 鈴木義男略年譜

1894(明治27)年 0歳	1月17日に、福島県白河町（現白河市）大字田町77番地で生まれる。父・義一、母・イエの6番目の子供で、三男であった（※長男は日露戦争で戦死、次男は1歳で死亡）。
1907(明治40)年 13歳	3月に白河町尋常小学校を卒業し、4月に東北学院普通科（中学）に入学。
1912(明治45)年 18歳	3月に東北学院普通科を卒業し、7月に第二高等学校（一部甲類）入学。
1915(大正4)年 21歳	7月に第二高等学校を卒業し、9月に東京帝国大学法科大学法律学科（英法兼修）入学。
1918(大正7)年 24歳	5月20日、鉄本常磐（宮城県玉造郡一栗村鉄本文吉三女）と結婚。
1919(大正8)年 25歳	3月24日、長女絢子生まれる。7月に東京帝国大学を卒業し、9月に東京帝国大学法学部助手に採用される（※助手は、1921[大正10]年7月29日まで）。
1920(大正9)年 26歳	9月1日、次女ゆり子生まれる。
1921(大正10)年 27歳	7月30日より文部省在外研究員として独・仏・伊・英に留学。8ヶ月私費延長して1924（大正13）年3月25日に帰朝。
1924(大正13)年 30歳	3月28日に東北帝国大学法文学部教授に任ぜられる。4月に行政法学講座担当、5月に特別講義法学概論兼担となる。
1930(昭和5)年 36歳	4月1日に辞職願を提出し、5月14日に認められる。この直後に東京地方裁判所に弁護士登録。弁護士事務所は九段一口坂。
1932(昭和7)年 38歳	4月1日から、弁護士と法政大学非常勤講師を兼務、当大学では行政法・英法を講義。
1934(昭和9)年 40歳	4月1日から、弁護士と法政大学教授を兼務、当大学では行政法・英法を講義。
1940(昭和15)年 46歳	3月に法政大学教授を辞す。
1945(昭和20)年 51歳	11月に日本社会党に入党。中央執行委員となる。
1946(昭和21)年 52歳	4月の総選挙で衆議院議員に福島二区から立候補し当選（1回目）。
1947(昭和22)年 53歳	4月の第23回総選挙で衆議院議員に当選（2回目）。6月に片山哲内閣の司法大臣に就任。また、7月には東北学院第6代理事長に就任。
1948(昭和23)年 54歳	3月10日に芦田均内閣の法務総裁（国務大臣）に就任。（※司法大臣は、1948（昭和23）年2月15日、「法務庁設置に伴う法令に関する法律」[昭和22年法律195号]により消滅）。
1949(昭和24)年 55歳	10月15日に国務大臣を退官。 1月の第24回総選挙で衆議院議員に当選（3回目）。
1951(昭和26)年 57歳	3月に専修大学教授となる（※後に専修大学学長、専修大学理事長に就任）。
1952(昭和27)年 58歳	10月の第25回総選挙で衆議院議員に当選（4回目）。
1953(昭和28)年 59歳	4月の第26回総選挙で衆議院議員に当選（5回目）。
1954(昭和29)年 60歳	1月に同志社大学より法学博士の学位を授与される。
1955(昭和30)年 61歳	2月の第27回総選挙で衆議院議員に当選（6回目）。
1958(昭和33)年 64歳	4月の第28回総選挙で落選。
1959(昭和34)年 65歳	4月より青山学院大学教授となる（行政法学を講義）。
1960(昭和35)年 66歳	1月に民主社会党の結党に参加。10月の第29回総選挙で衆議院議員に当選（7回目）。
1962(昭和37)年 68歳	11月に青山学院大学構内にて講義を終えた後倒れ、慶応病院入院。
1963(昭和38)年 69歳	8月25日午前11時29分、聖路加病院にて死去。8月31日に青山学院大学礼拝堂において葬儀。9月14日、東北学院大学ラーハウスで記念礼拝堂で追悼式。
1964(昭和39)年	5月15日、鈴木義男の蔵書560点余りが、遺族より東北学院に寄贈される。12月24日、鈴木義男伝記刊行会が『鈴木義男』を刊行。

筆者 仁昌寺 正一プロフィール

NISHOJI, Shoichi

1950（昭和25）年生まれ

東北学院大学大学院経済学研究科博士後期課程満期退学。

東北学院大学経済学部助手・講師・助教授を経て現職。

『大正デモクラシーと東北学院—杉山元治郎と鈴木義男—』（学校法人東北学院、2006年10月）において、鈴木義男を担当・執筆。

# 東北学院航空工業専門学校の 誕生と萱場資郎

東北学院大学工学部 教授  
鶴本 勝夫



## 1. はじめに

東北学院は明治19年（1886）5月にキリスト教伝道者養成のため「仙台神学校」として創立され、明治24年（1891）東北学院と改称した。以後、現在まで(1)～(4)の理工系学部・学科が開設されている。

(1) 理科専修部

【明治28年4月～明治30年3月】

(2) 航空工業専門学校

【昭和19年4月～昭和20年9月】

(3) 工業専門学校

【昭和20年9月～昭和22年3月】

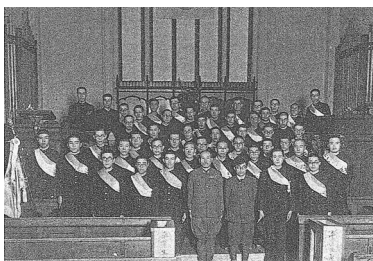
(4) 工学部

【昭和37年4月～現在】

ただし、(2)の東北学院航空工業専門学校（以下、航空工専と称す）の開設は、太平洋戦争の真っただ中にあり、それは東北学院存続の命運を担った「非常事態での開設」であった。これを陰で支えたのが、東北学院の出身者で現カヤバ工業㈱の創業者である萱場資郎であった。ここに航空工専誕生の経緯と萱場資郎の関わりを記録に留めたい。

## 2. 太平洋戦争への道

日本は第1次世界大戦後、東南アジア圏内の権益を手中に入れようと画策を始めた。手始めに昭和12年7月7日、日支事変（蘆溝橋事件）を誘発、中国大陸侵攻の野望を膨らませていった。中国への南方からの英仏支援ルートを断つため、昭和14年2月、日本の陸海軍部隊は南シナ海とトンキン湾に浮かぶフランスの半植民地・海南島を占領した。ここに航空基地を設けるほか、鉄鉱石資源を取得するのが目的であった。昭和15年9月23日には北ベトナムに進駐した。いよいよ昭和16年12月8日、日本は米国に対し、真珠湾攻撃という奇



礼拝堂における学徒出陣壮行会

策を労して太平洋戦争に突入した。「鬼畜米英」を合言葉に国家総動員令のもと、苦難の道の幕開けとなった。雨の明治神宮外苑での学徒動員にみられる悲壮な決意は、今日にしてみれば取り返しのない出発点となった。教育現場では、国家統制の色あいが濃く投影され、東北学院もその例外ではなかったのである。

## 3. 出村悌三郎院長の苦悩

東北学院の校庭には奉安殿が設けられ、礼拝に先立ち国家斉唱と国旗掲揚並びに宮城遙拝が行われた。陸軍将校は校内に常駐していた。

「天皇陛下とキリストは、どちらが偉いか？」など、即答に窮する質問がしばしば投げかけられていた。出村院長は、穏便に対応することを心掛け、国策には従順であるとの談話「国の命令に従うことは、青年の意図とするところ、国策に殉じることは栄光なり」を発し、苦しい胸のうちを納得させていた。



出村悌三郎  
（東北学院第三代院長）

かねてより米国ミッションボードから支援を受けていた東北学院は、日米開戦で支援を仰ぐわけにいかず自給自立の方策を取らざるを得なくなった。このことを予見していた東北学院元理事・同窓会東京支部長の萱場資郎【東北学院中学部卒（大正5年3月）】は、種々の提言を行っている。特に、経済的な支援を確約するとともに「工業高専の開設」など時宜にかなった学校経営を行い、増収を計るべきと提案している。

## 4. 東北学院に廃校命令

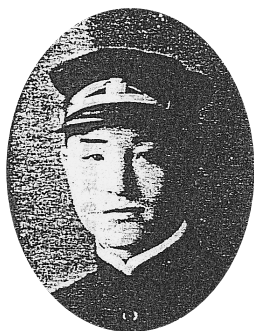
昭和18年10月18日、東北軍管区司令官東海林俊成少将は「東北学院は時節柄、不要不急の教育機関である。今年度限りで廃校とし、校舎は陸軍において接収する」との命令を出した。出村悌三郎院長は顔



面蒼白、重い十字架を背負わされたのだった。この時唯一頼みにした相談者が、先の萱場資郎だった。

## 5. 萱場資郎

萱場資郎は明治31年（1898）4月1日、仙台市荒井畑中で生れた。萱場家は代々富豪の農家であり、第12代当主の富次郎と母よさの次男で、幼少の頃は体が弱かったといわれる。荒井小学校から比較的ゆったりとした教育が受けられるとして、明治45年（1912）4月東北学院中学部に入学した。在学中、D.B.シュネーダー（第二代院長）のキリスト教説教にいたく共鳴し、自分の部屋には世界地図を広げて「世界平和、平和共存」を真剣に考えるようになった。【当時は「萱場四郎」と名乗り、昭和18年、45歳のときに「萱場資郎」と改名した。】しかし、本来平和を謳うべきキリスト教圏の米、英が戦争をしかけ、大量の殺戮を行っていることに疑問を感じるようになった。



東北学院中学部在学時の  
萱場四郎  
写真：カヤバ工業株式会社提供

悶々とする中、大正6年（1917）4月明治大学に進学、後に早稲田大学に在籍した。在学中、東大造兵科の学生のノートを借り受け、我を忘れて兵器研究に没頭した。「日本が平和を維持するためには、最強の兵器を開発し、他国からの侵略を許さないようにすることだ」と考えるようになった。早稲田大学での講義は無味乾燥との思いを強くして退学、大正8年（1919）東京市芝区に「萱場発明研究所」を設立、所長となった。

種々の兵器開発に、時の陸海軍が関心を寄せ大正10年（1921）から昭和2年（1927）の間、海軍艦政本部の囑託に招請されている。主に航空機の空油圧緩衝装置の開発に秀でるものがあり、萱場発明研究所を発展的に解消して、萱場製作所を創業した。昭和2年1月のことである。この時、側面から応援してくれたのが艦政本部長の山梨勝之進であった。【山梨勝之進は仙台市中島丁出身の海軍大将で、後に学習院院長を歴任した。現天皇が学習院在学中の院長である。本学で教鞭をとったミス・ゲルハードが再来日した折、皇太后（良子親王）が面会の希望を述べられ、その仲介役を果たしている。山梨



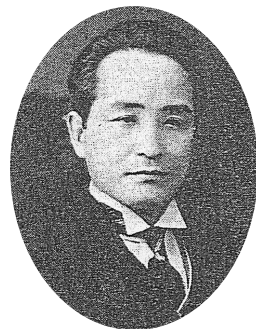
山梨勝之進  
(海軍大将、後に学習院院長)

は昭和37年（1962）3月26日、本学を訪ね小田忠夫学長にその経緯を報告している。】

萱場製作所創業に際しては、山梨のお蔭で海軍の強い慰留を押し切り、独立することができた。さらに大量の兵器製作依頼を受けている。同県人の支援に萱場は感激、後々までこの恩義を忘れないでいた。山梨は求めに応じて萱場製作所を訪ねている。

昭和10年（1935）3月10日、株式会社萱場製作所に改組、取締役社長になる。これより昭和30年11月同社相談役となるまでに、特に太平洋戦争の真ただ中、日本の軍需産業の一翼を担う企業に成長させた。

昭和49年（1974）5月12日逝去。76才。日蓮宗池上本門寺（東京都大田区池上）に眠る。



(株)萱場製作所設立当時の  
萱場資郎  
写真：カヤバ工業株式会社提供

## 6. 東北学院航空工専開設のための交渉

昭和18年（1943）10月18日、東北学院理事会で萱場資郎の提案による「東北学院航空工業専門学校の設置（案）」が認められ、開設に向けて具体的に交渉を進めることになった。主として萱場資郎の人脈を軸に、軍、地方自治体、大学にそれぞれ働きかけが始まった。

初めは陸軍関係者から「東北学院の廃校命令解除」の報を得ることと同時に「航空工専開設の認可」を得ることだった。主な折衝要人には次の①～⑧の方々が含まれていた。

- ① 東北軍管区司令官 東海林俊成少将
- ② 陸軍航空本部教育部長 隈部正美少将
- ③ 宮城県 内田信也知事
- ④ 宮城県 久安博忠内政部長
- ⑤ 文部省 永井 浩教育局長
- ⑥ 東北大学 熊谷岱蔵総長
- ⑦ 東北大学 宮城音五郎工学部長
- ⑧ 萱場製作所顧問 伊達興宗（伊達宗家三十三世）

航空工専の教授陣は、東北大学工学部航空学科の全面的な協力を得るため、宮城音五郎工学部長に兼務のまま航空工専校長就任を要請した。

萱場資郎と隈部少将は、仙台第二師団にも関係した石原莞爾中将の命令を受け



熊谷岱蔵（東北大学総長）

て、ソ満国境地帯を視察した旧知の仲であり、熊谷岱蔵総長とは萱場の叔父次郎（内科医開業）が同先生の愛弟子であったことや、萱場自身が東北大学病院に入院したとき、直接先生の診察を受けている。最も幸いしたことは、熊谷総長がD.B. シュネーダー院長と懇意にされており、東北学院に対して深い理解があったといわれる。シュネーダーの臨終に際しては、自ら立ち会われている。伊達興宗は、山梨勝之進海軍艦政本部長の推薦を受けて萱場製作所の顧問に就任していた。



宮城音五郎  
（東北大学工学部部長・兼東北学院航空工業専門学校長）  
写真：東北工業大学提供

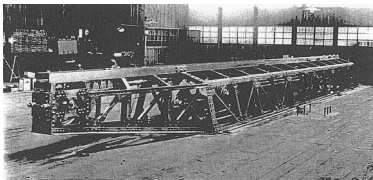
## 7. 東北学院に対する廃校命令解除

昭和18年（1943）11月27日、隈部少将による東北軍管区司令官への進言が功を奏し「東北学院の廃校命令を解除する」との通知が届いた。これを受けて同年12月30日、宮城音五郎東北大学工学部部長は、兼任のまま東北学院航空工業専門学校の校長就任を表明した。

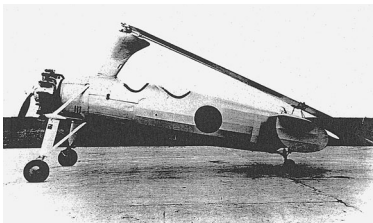
航空工専開学にあたり、設備資金として32万円、一年分の経費10万円の計42万円を用意する必要があったが、設備資金については実習工場として萱場製作所仙台製造所を提供することとし、経費10万円は昭和18年12月16日、萱場自身が出資している。

## 8. 萱場製作所仙台製造所

萱場製作所は陸海軍から高い技術評価を受け、全国に九工場をもつ日本有数の軍需工場となっていた。特に空油圧装置を得意とし、海軍最初の飛行機射出機（カタパルト）を昭和3年8月に完成している。萱場電動発条（ばね）飛行機射出機は、巡洋艦「五十鈴」に搭載された。



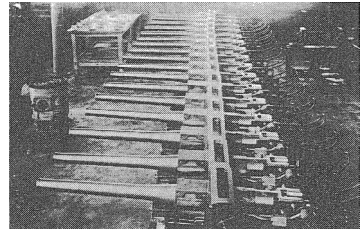
日本海軍最初の飛行機射出機（カタパルト）  
写真：カヤバ工業株式会社提供



仙台製造所のみで生産されたカヤバオートジャイロ（カニ観測機）  
写真：カヤバ工業株式会社提供

昭和15年に倉敷紡績(株)工場跡（仙台市長町八本松、最近まで北日本電線(株)の敷地）に、宮城県、仙台市から

要請を受けて仙台製造所を設けた。仙台製造所では昭和18年から「萱場資郎の夢」でもあったヘリコプターの前身であるオートジャイロの量産



仙台製造所で生産開始した37ミリ戦車砲  
写真：カヤバ工業株式会社提供

に踏み切り、90機生産している。これは偵察、弾着精密観測、対潜砲戒攻撃、太平洋沿岸および朝鮮海峡の砲戒に使用され、空母「秋津丸」や「山城丸」に搭載された。仙台製造所では37ミリ戦車砲も製造していた。当時、仙台製造所の従業員は2500名いた。

## 9. 東北学院航空工専開学

昭和19年（1944）3月23日～25日の3日間入学試験を行い、いよいよ同年4月宮城音五郎校長のもと、開学の運びとなった。

開学の目的を「本学ハ専門学校令ノ定ムルトコロニ依リ、航空工業ニ従事スヘキ者ニ高等ノ學術技芸ヲ授ケ、国家有用ノ人物ヲ練成スルヲ以テ目的トス」と定めた。学生服の襟章には「航空工専」の横文字が入り、その上にイーグルスが止まっているものが使用された。入学生は航空機科百名、発動機科は五十名の百五十名、修業年限は三年。校舎は仙台市南六軒丁一番地。授業料は二百二十円とした。

教授陣は東北大学工学部航空学科、東北学院専門部の教員および東北軍管区将校とで構成された。主な顔ぶれは次の通り。

○東北大学：宮城音五郎（航空概論）樋口盛一（機械工学）宇田新太郎、抜山平一（電気工学）中鉢竜男（飛行力学）石原康正（機械設計法）柵沢泰（航空原動機）松山徳蔵（材料力学）坪内為雄、吉沢幸雄（熱力学）成瀬政男（機械工作）斎藤秀雄（機械力学）。

○東北学院専門部：菊田善三（数学）村井洪一（化学）月浦利雄（英語）大森純雄（工場経営）佐々久（国史）小泉要太郎（国民道徳）。

○東北軍管区：森清一、高橋儀兵衛（軍事教練）

航空工専の正門をくぐると礼拝堂の東側に、2機の飛行機が置かれていた。九八式軽爆撃機（川崎重工製）とベニヤ板張りの特別攻撃機である。[英文科志子田光雄教授の証言による]



九八式軽爆撃機（川崎重工製）

また、航空工専第一期入学生



の高橋信隆氏（元利府町長）によれば「授業は満足に行われず、中島飛行機（群馬県太田市）や萱場製作所仙台製造所などに学徒動員させられた。悲しいかな、中島飛行機への学徒動員では、級友の保原利貞君が墜落米機に巻き込まれて事故死、軍事教練では、増森敬治君が名取川での渡河訓練中、渡し舟の底が抜けて溺死してしまった」ことが思い出されるという。

## 10. 航空工専の終焉

昭和20年8月15日、広島、長崎への原爆投下など、戦禍の拡大に伴い遂に日本はポツダム宣言を受諾し、無条件降伏した。国策に従って開設した航空工専も用をなさなくなり、同年9月18日「東北学院航空工業専門学校」を「東北学院工業専門学校」と名称変更し、大幅な学科改組を行った。収容定員は、生産工業科百四十名（機械科七十名、建築科七十名）、工業経営科六十名とした。

昭和21年2月、宮城音五郎校長が辞任、代って出村剛が就任した。「昭和22年3月、工業専門学校の廃止」が決定され、同年4月新たに文経の専門学校が設置されることになった。

昭和20年8月の時点で航空工専の在學生には、廃止に伴う身の振り方について3つの進路が示された。

- ① 昭和22年3月に工業専門学校生として卒業する。
- ② 昭和23年3月に文経専門学校生として卒業する（この場合、航空工専の2年生は、昭和21年4月、文経専門学校の2年に編入し、2年生を二度やることになる）。
- ③ 他の理工系専門学校へ転校する（学校側は、関東学院専門学校などへの転校を勧めた）。

## 11. むすび

軍靴の足音高く、軍国主義のもとその犠牲になった人々の中には、今なお東南アジアの密林の中に押しやられている。仙台も昭和20年7月9日空襲にあい、悲惨な状況に陥った。

東北学院は戦時中に、陸軍から廃校命令が出されるなど、存立が危ぶまれたが、幸い卒業生の萱場資郎の支援を受け、その命脈を繋ぐことができた。萱場の働きは的確であり、軍部や政財界並びに教育界に太いパイプを有していたことが幸いした。

萱場資郎は青年期に東北学院第二代院長のD. B. シュネーダーよりキリスト教教育を受けたが、殺戮を繰り返すキリスト教圏の米英の振るまいに疑問を感じ、日本を真に平和国家として守るためには「最強の軍備が必要」と確信するに至った。当時の情勢からすれば、自然な帰結であったろうと想像する。

軍需産業の一翼を担った萱場製作所仙台製造所が、東北学院航空工業専門学校の誕生に貢献したことは、時代が時代であり「背に腹は代えられぬ」窮余の選択であったことは否めない。萱場は卒業生として純粹に東北学院の存続を願い、教育によってかけがえない人材を世に送ることに“命”をかけた真（まこと）の人であったと理解する。

萱場は後に「東北学院航空工業専門学校は2年、工業専門学校は1年と短命であったが、これは東北学院大学工学部創設の礎石となった」と述懐している。萱場は戦時中の情勢や会社経営、技術開発および個人の心情などについては、詳しく記録を残しているが、心身を賭して支えた東北学院航空工業専門学校誕生の経緯については、東北学院創立85周年記念日（昭和46年5月15日）に開催されたTG15日会の講演会席上で初めて明かしている。正に「地の塩」としての働きであった。

【参考】「東北学院七十年史」「東北学院百年史、同資料篇」「東北学院時報（No.261、262、1971）」「カヤバ工業50年史」「けんゆう創立七十年記念特別号（No.547、2005）」「独創開発の歩み—萱場資郎—」



出村 剛  
（東北学院工業専門学校長）

鶴本 勝夫プロフィール TSURUMOTO, Katsuo

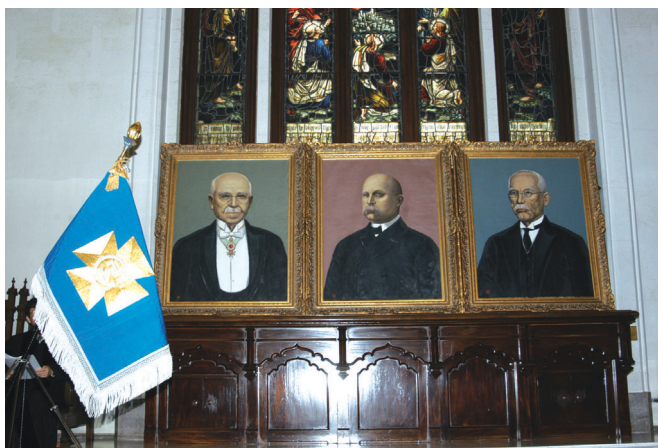
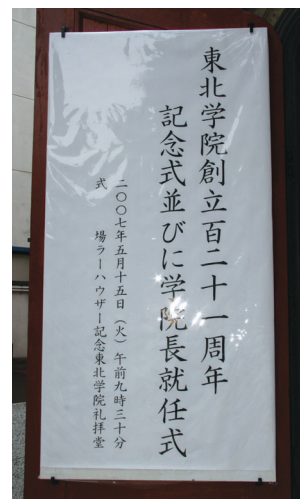
1942（昭和17）年7月、仙台生まれ  
東北学院大学工学部機械工学科卒業（第1回生）。東北東北学院大学工学部助手・講師・助教授を経て現在、東北学院大学工学部機械知能工学科教授。専門は機械設計工学、磁気歯車工学。

# 東北学院創立121周年記念式

## 学院長就任式を挙行 ～第10代学院長に星宮望学長～

初夏の薫りを運ぶ5月、東北学院は15日に創立121周年を迎え、創立記念式と星宮望新学院長の就任式ならびに校祖墓前礼拝を挙行、神への感謝と諸先達の偉業に敬意を表し、建学の精神に立ち返り決意を新たにした。

創立記念式は、星宮望新学院長の就任式を兼ねて、土樋キャンパスのラーハウザー記念礼拝堂で執り行われ、来賓、同窓生、学生と生徒代表、教職員などが出席した。礼拝堂正面の聖壇には三校祖の肖像画が飾られ、厳かな雰囲気の中で学院長就任の儀が執り行われた。学院長就任式が行われるのは、平成15年の倉松功前学院長就任式以来のこと。佐々木哲夫宗教部長の立ち会いのもと、赤澤昭三理事長から星宮学院長に校鍵が手渡された。赤澤理事長の式辞に続き星宮学院長・学長が就任あいさつを述べ「三校祖につらなる東北学院の第十代学院長を拝命するにあたり、



礼拝堂聖壇に飾られた三校祖の肖像画

神様からの負託の大きさを感じますとともに、歴史と伝統ある本学院の歩みに貢献できることを大変光栄に思います。これからの学校法人の歩みに対して私自身が皆様とともに一致協力して努力する所存ですが、そのことに加えて、人知を超えた大いなる神様のご計画に関連して、真心をもって神様をお願いしたいと思います」と決意を新たにした。引き続き永年勤続表彰（25年）が執り行われた。



式辞を述べる赤澤理事長



赤澤理事長より校鍵を受取る星宮学院長(右)





永年勤続(25年)受賞教職員



司式者：大童敬郎法人事務局長





## 墓前礼拝

記念式のあと、偉業を成し遂げた多くの先人が眠る青葉区の北山墓地で、午前11時から墓前礼拝が守られ、日本基督教団仙台南伝道所の佐藤義子牧師の『我に倣う者となれ』と題する説教を聴いた。続いて、赤澤理事長、星宮学院長・学長が三校祖の墓前に花を捧げた。なお、墓前礼拝に先立ち、中学・高等学校と榴ヶ岡高校では記念式、記念礼拝や記念講演などが行われた。



説教をする佐藤義子牧師



献花をする赤澤理事長



星宮学院長





# オープンキャンパス2007

過去最多の5,000人が参加、一足早く学院大生を体感!!

東北学院大学生を一足早く体験できるオープンキャンパス（大学公開見学会）が、8月4、5日に泉キャンパスと多賀城キャンパスで開催された。

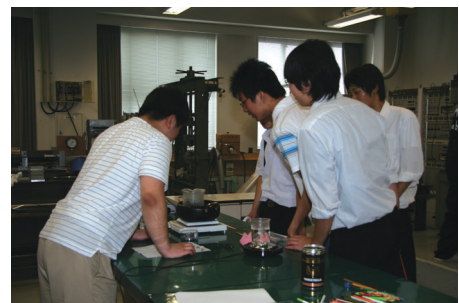
東北学院大学の理解を深めるイベントとして今年で9回目を迎えたオープンキャンパス。県内外から受験希望の生徒や保護者が大勢参加し、両キャンパス合わせて、過去最多の約4,700人が集まった。この他、10月まで実施された各学部オープンキャンパスや秋田地区オープンキャンパスの参加者を合わせると5,000人を突破した。泉キャンパスでは文・経・法・教養学部の学校公開が行われ、小雨降る中、早朝より参加者が次々と集まり、約4,100人が訪れた。入試説明会では千葉昭彦入試部長から平成20年度の各種入試制度の変更点や動向などについて説明を受けた。また、学科ごとのガイダンスも活発に行われ、模擬授業をはじめ随所で趣向が凝らされ好評を博した。教員との就職や奨学金などの個別相談や、在学生との学校生活やクラブ活動などの懇談では、なごやかに談笑する姿がいたるところで見受けられた。受付終了後もキャンパスをじっくりと見学する姿が絶えず、泉キャンパスは終日にぎわいを見せた。なお、教養学部では10月27日の大学祭に併せて独自のオープンキャンパスも開催した。

一方、多賀城キャンパスでは工学部のオープンキャンパスが8月4日、5日の両日行われ、約600人が参加した。午前9時からの受付を前に通路やラウンジにたくさんの受験生達が集まり、受付開始とともに、総合案内や入試・学生生活・就職相談などの個別コーナーに詰め掛け、相談担当の教員の話に耳を傾けていた。入試説明

会や各学科の説明会では熱心にメモを取る姿も見られ、会場は真剣な雰囲気にも包まれていた。パイプオルガン演奏も催され、静かに聴き入っていた。また、学生の案内による研究室、実験室の見学では、教員から研究内容の説明を受け、工学教育への関心を深めていた。なお、多賀城キャンパスでは、2回目のオープンキャンパスが、10月6日と7日の工学部祭に併せて開催された。











## 秋田オープンキャンパス初開催！

本学として県外初のオープンキャンパスとなる「まると東北学院大学 IN AKITA」を、7月15日に秋田市文化会館を会場に開催した。



この企画は、県外の中학생、高校生やご父母、同窓生、一般の方々にも本学を幅広く、また、より深く知ってもらいたいという思いから実現に至ったもので、秋田県で初開催となった。当日、多数の参加者が訪れ、会場には学部学科の紹介やミニ講義の他、入学から卒業までを分かりやすく説明するコーナーや、秋田出身の在學生から、大学生活や仙台での暮らしなどホットな情報を聞くことのできるコーナー、さらに入学後の住まいの状況や生活に関する情報を提供するコーナーも設けられ、会場は活気のあるものとなった。





## 3キャンパスで大学祭開催!!

# 大学祭



## 工学部祭 10月6日～7日

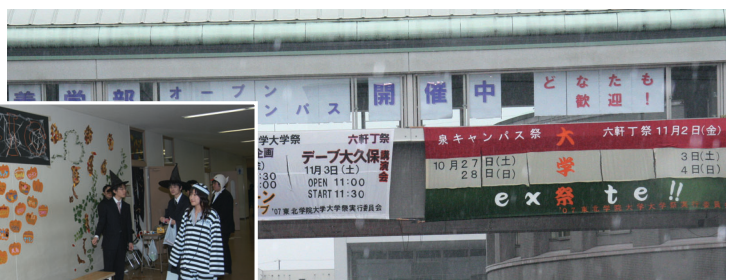
多賀城キャンパスでは、通算42回目の工学部祭が、10月6日、7日に、「創造」のテーマのもと開催された。初日は、晴天に恵まれ、オープニングでは応援団とチャリーディングによるアトラクションで盛り上がりを見せ、翌7日を含め、約8,500名が参加し大いに賑わった。特設ステージでは、本学学生グループ「シャベルカー」による、お笑いライブが行われ、多数がつめかけた会場は爆笑の渦と化した。研究室では最先端の実験なども公開され、美術部などは日頃の成果を発表。キャンパスの一角ではチャリティーバザーが行われ、掘り出し物を求めるたくさんの人でにぎわった。期間中は、工学部祭と並行してオープンキャンパスも行われ、高校生らが研究室などを見学したり、各学科に関する相談コーナーでは熱心に説明を聞いていた。





# 泉キャンパス祭 10月27日～28日

泉キャンパスでは、泉キャンパス祭が10月27日、28日の両日開催された。開会式当日、朝から小雨が降る中、応援団のエールによって祭りの開幕が告げられた。恒例になったフリーマーケットやチャリティーバザーには地域住民が押し寄せ好評であった。悪天候にもかかわらず、午前中から大勢の家族連れや高校生が詰めかけた。初日には、教養学部のオープンキャンパスも併せて開催され、先生の説明を熱心に聞き入る高校生の姿が各教室で見受けられた。二日目は恒例の芸能人企画「沢村一樹トークショー」が催され、大勢のファンを魅了した。エンディングセレモニーでも多くの人を集め、大盛況の内に幕を閉じた。







## 六軒丁祭 11月2日～4日

六軒丁祭は、11月2日から3日間にわたり、土樋キャンパスを舞台に開催された。初日は、開会式に先立ち恒例となった仮装パレードで仙台市内の一番町通りを練り歩き、市民へ祭の開幕を知らせた。開会式は特設ステージで行われ、続いて芸能人企画ではお笑い界の人気ゲスト「ハマカーン」の漫才が会場を笑いの渦に巻き込んだ。今年初めての試みとして地域との交流を目的とするステージ企画が行われた。愛宕商店街の有志の方による和太鼓の会「めとう会」がこの企画に参加し大盛況であった。イベントの目玉である「デーブ大久保講演会」では、参加者が感銘を受けている姿が見受けられた。その他、非木材原料で作られた環境にやさしい「エコ容器」を使用したり、ゴミ分別のためのリサイクルステーションを設置し、今話題の環境問題にも積極的に取り組んだ。今年は92団体が参加し、大勢の一般来場者を集めた大学祭となった。



置し、今話題の環境問題にも積極的に取り組んだ。今年は92団体が参加し、大勢の一般来場者を集めた大学祭となった。







## 学院祭

### 学院祭 9月8日～9日

第48回学院祭は“エネルギーの漲りと命の躍動”という意味を込めた「青春どまん中」をテーマに開催された。屋内では作品の展示、研究発表、ギターのライブ演奏、音楽演奏会、映画上映など、野外ステージでは、総勢50人におよぶ生徒達による「TGソーラン節」の演舞などが催され、見どころ一杯の活気あふれる学院祭となり、来校者の好評を博した。







## 榴 祭

### 榴祭 8月31日～9月1日

今年（第39回）の榴祭は、新しい体育館等の建設工事により体育館を使用できない状況下の中で開催されたが、「爽快！痛快！榴祭！」をテーマに創意工夫を凝らし、逆境をものともしない榴スピリットを反映した公演、演武、展示発表、出店などの催し物が展開され、好評を博した。





# 幼稚園

わくわくどきどきでスタートした園児生活、さまざまな行事を通して園児達は楽しさ面白さを発見!!

## 入園式 4月11日



## 運動会 9月29日



## 造形展 11月3日~4日



## クリスマス 12月14日







あいさつ：星宮望学院長・同窓会長



受付風景

# 第8回 ホームカミングデー 『同窓祭』

平成19年10月13日(土)



来賓のあいさつ  
郡和子氏（昭54卒）



来賓のあいさつ  
土井亨氏（昭56卒）



三井精一副会長による乾杯



讃美歌を斉唱する出席者



同窓生代表あいさつ  
山本修氏（昭46卒）



記念礼拝が、ラーハウザー記念礼拝堂で執り行われ、今回はじめてグリークラブOB合唱団による合唱も披露された。引き続き記念式が行われ、星宮望学院長・同窓会長があいさつをし、山本修氏〔(株)竹中工務店東北支店次長(昭46経商卒)〕が「同窓会と大学との活発な交流を通して、大学長が提唱する『若者の心を育てる』ことに少しでも役立つことが出来れば幸いです」とあいさつした。続いて、パイプオルガンコンサートが開催された。



グリークラブOB合唱団による合唱

## 懐かしい顔！懐かしい声！

全国で活躍する同窓生が一堂に会し、互いに旧交を温め合い、学生や教職員との懐かしい再会を喜び合う東北学院大学ホームカミングデーが、十月十三日、土樋キャンパスを会場に盛大に開催された。記念式をはじめ「懐かしい出会いの夕べ(記念パーティー)」などの諸行事には数多くの同窓生らが集まった。



来賓のあいさつ  
中野正志氏(昭45卒)





## 懐かしい出会いの夕べ

記念パーティーは江陽グランドホテルを会場に午後五時から開催され、約350人の同窓生が集まった。志伯暁子さん（昭51法卒）の司会のもと、会場内では旧友・恩師との出会いとともに学生時代の懐かしい

思い出に浸り、終始和やかな歓談の輪が広がった。アトラクションでは、同窓生で歌手のさとう宗幸氏（昭47経経卒）の熱唱で存分に歌の世界に浸り、また恒例となったSWEの同窓生で編成されたモッシージャズオーケストラのジャズの音に陶醉した。応援団、SWE、チアリーディングチームによる応援歌も花を添え、記念の福引き抽選会なども行われ、母校との絆をより深める一日となった。



卒業生代表あいさつ  
大槻秀樹氏



さとう宗幸氏によるミニコンサート



名誉教授紹介



福引き抽選をする星宮学院長・同窓会長(左)



演奏をするモッシージャズオーケストラ



司会者：志伯暁子氏



応援歌を披露する応援団、チアリーディングチーム





# 東北学院文化講演会2007

— 福島県で盛大に開催される —



受付風景

東北学院大学「文化講演会2007」が、11月17日に「コラッセふくしま」で開催され、市民や同窓生など約三百人が参加した。小泉武夫氏（東京農業大学応用生物科学部醸造科学科教授）は、「発酵の神秘—発酵と人類の知恵」と題し講演を行い、食の文化を後世に残す「食の世界遺産」を提唱。弘前市のアケビのなれ寿司、納豆、甘酒、白山市のふぐの卵巣のぬか漬けなど、人類にとって大切なものである発酵食品を分かりやすく、そして面白く語り、来場者の好評を博した。この後引き続き、福島県同窓会が開催された。



講師：小泉武夫氏（東京農業大学教授）



あいさつをする星宮望学長





## 福島県同窓会を開催



星宮望同窓会長より感謝状を受ける志賀虎彦原町支部長

東北学院大学文化講演会2007が福島市で開催されたのに合わせ、東北学院福島県同窓会が去る11月17日(土)午後6時からホテル福島グリーンパレスで盛大に開催された。当日は福島県北支部をはじめ、郡山支部、相馬支部、南相馬支部、いわき支部、会津若松支部から100名を超える同窓生が一堂に会し、旧交を温めた。会は平河内健治人事担当常任理事の開会祈祷から始まり、実行委員長の山田常雄氏が「これまで念願だった福島県合同の同窓会が開催できて感無量です。福島県においても卒業後20年から30年過ぎた同窓生は、各職場でそれぞれ重要なポストに就いています。また、母校には将来を見据えて医学部の設置を検討していただきたい

校には将来を見据えて医学部の設置を検討していただきたい。寄付は惜しまない」と挨拶すると、会場は歓声に包まれた。懇親会では、長らく原町支部長（現南相馬支部）として尽力された志賀虎彦氏に星宮望同窓会長から感謝状と記念品が贈呈され、参加者から惜しめない拍手が送られた。その後、平成19年4月1日に福島市が市制100周年を迎えたのを祝い、福島市役所に勤務する有志がステージに登場すると会場は大いに盛り上がりを見せていた。特に、馬場敏郎氏のマイクさばきが（舌）好調で、しばしステージに釘付けとなる者も多く、楽しいひと時を過ごしていた。



あいさつをする山田常雄実行委員長



福島市役所に勤務する同窓生たち（マイクは馬場敏郎氏）





# 2007(平成19)年時事

東北学院に関する主な時事		東北学院に関する主な時事			
1月	10日	TG推薦入学試験合格発表／中学入学試験	4月	幼稚園事務長に高橋嘉男氏が就任	
	11日	中学入学試験合格発表		4日	大学入学式
	15日	TG十五日会		9日	中学・高校入学式／榴ヶ岡高校入学式
	16日	大学後期試験(土樋・泉：～24日、多賀城：～26日)		11日	幼稚園入園式
	17日	榴ヶ岡高校推薦入学試験		12日	TG十五日会
	18日	外国人留学生歓送会		18日	榴ヶ岡高校イースター礼拝
	20日	大学入試センター試験(～21日)		19日	榴ヶ岡高校体育館及び管理棟起工式
2月	22日	「2007年世界ジュニア・カデ・フェンシング選手権大会」日本代表の鈴木誠史君(高校2年)が宮城県庁を表敬訪問	21日	幼稚園イースター礼拝	
	1日	大学一般入学試験前期日程(～4日)／榴ヶ岡高校入学試験	23日	中学・高校イースター礼拝	
	3日	法科大学院後期日程入学試験(～4日)	27日	中学・高校奨学会総会	
	5日	高校入学試験	28日	キリスト教学科公開ファカルティ・フォーラム	
	6日	榴ヶ岡高校入学試験合格発表	5月	8日	中学・高校運動会／幼稚園 園外保育
	8日	高校入学試験合格発表		第31回全国高等学校総合文化祭小倉百人一首かると部門宮城県予選で、榴ヶ岡高校が全国大会へ出場決定	
	11日	大学一般入学試験前期日程・センター試験利用入学試験前期・外国人留学生特別入学試験合格発表		9日	大学春季特別伝道礼拝(～10日)
15日	TG十五日会	12日		榴ヶ岡高校奨学会総会	
16日	法科大学院後期日程入学試験合格発表／TG推薦入学誓約式	15日		創立121周年記念式／墓前礼拝／学院長就任式	
3月	21日	大学院春季入学試験(～22日)	22日	幼稚園遠足	
	1日	高校卒業式／榴ヶ岡高校卒業式、大学院春季入学試験合格発表	6月	2日	第56回県高校総体(～4日)空手男子組手団体24年ぶり優勝に
	5日	再入学試験、夜間主社会人特別入学試験B日程、編入学試験B日程、転学部・転学科試験		9日	市中総体(～11日)
	6日	大学一般入学試験後期日程		15日	第53回対北海学園大学定期戦(～17日)／TG十五日会
	13日	中学・高校新寄宿舎定礎式・献堂式		第58回東北地区大学総合体育大会(～7月2日)	
	15日	ハイテク・リサーチ・センター定礎式・献堂式／TG十五日会		16日	日本基督教会第41回東北支部学術大会(泉キャンパス)
	16日	幼稚園卒園式		17日	第63回学生名人戦(全日本学生将棋連盟主催)で本学将棋部の星宮謙さん(物理情報工学科3年)が準優勝
24日	中学校卒業式	23日		第3回仙台国際音楽コンクール・ピアノ部門で中学・高校出身の津田裕也さん(現東京芸大大学院3年)が優勝	
4月	26日	大学卒業式・学位記授与式	大学院博士前期課程(修士課程)A日程入学特別選考		
	2日	役職者等辞令交付式／人事異動辞令交付式／新任職員辞令交付式	29日	大学院博士前期課程(修士課程)A日程入学特別選考合格発表	
	学院長に星宮望氏が就任	30日	宗教音楽研究所「宗教音楽の夕べ」／文学部・法学部オープンキャンパス		
	総務部長に柴田良孝氏が就任	7月	1日	大学後援会総会	
	就職部長に原征明氏が就任		7日	教養学部オープンキャンパス	
	入試部長に千葉昭彦氏が就任		13日	TG十五日会	
	庶務部長に高橋清昭氏が就任		14日	中学・高校オープンキャンパス	
中学・高校長に永井英司氏が就任	15日		秋田地区オープンキャンパス		
中学・高校副校長に田中広志氏が就任	26日	2007年度第35回アメリカ研究アーサイナス大学夏期留学(～8月25日)			
榴ヶ岡高校事務長に佐藤範明氏が就任					



東北学院に関する主な時事		東北学院に関する主な時事			
8月	1日	2007年度平澤大学校夏期語学研修（～8月28日）	11月	7日	中学・高校マラソン大会
	4日	オープンキャンパス（泉）／（多賀城～5日）		14日	TG十五日会／推薦入学試験・AO入学試験（A日程）・夜間主社会人入学試験（A日程）試験日
	20日	中学・高校が World robot olympiad 東北地区予選会で優勝、全国大会進出へ		15日	平成19年度東北学院大学FD講演会
	23日	第59回全日本大学準硬式野球選手権大会（対桜美林大学）で惜しくも準優勝を果たす		16日	英語英文学研究所学術講演会
	25日	榴ヶ岡高校オープンキャンパス／法務研究科前期日程入学試験（～26日）		17日	東北学院大学文化講演会2007
	30日	第58回対青山学院大学総合定期戦（～31日）		24日	推薦入学試験・AO入学試験（A日程）・夜間主社会人入学試験（A日程）合格発表
	31日	榴ヶ岡高校“榴祭”（～9月1日）	30日	キリスト教文化研究所第49回学術講演会／英語英文学研究所学術講演会	
9月	3日	大学教職員修養会（～4日）	12月	7日	第19回泉キャンパスクリスマス
	4日	中学・高校TGスポーツ大会（～5日）		14日	TG十五日会／第58回公開東北学院クリスマス礼拝
	8日	中学・高校“学院祭”（～9日）		21日	教職員クリスマス礼拝・祝会
	10日	2007年度日本研究秋期講座（～12月10日）／2007年度集中日本語講座（～2008年7月）			
	11日	法務研究科前期日程入学試験合格発表			
	13日	新司法試験合格発表で本学法科大学院1期生3名が合格			
	14日	TG十五日会			
	23日	稲垣忠教養学部准教授に日本教育工学会より論文賞			
	28日	9月期卒業証書・学位記授与式／オーディオ・ヴィジュアルセンター公開学術講演会 名誉教授・元経済学部教授鈴木勝男氏に博士（経済学）の学位が授与される			
29日	大学院特別選考（B日程）入学試験および秋季入学試験／幼稚園運動会				
10月	2日	大学秋季特別伝道礼拝（～3日）	12月		
	4日	編入学試験（A日程）			
	5日	大学院特別選考（B日程）入学試験合格発表および秋季入学試験合格発表			
	6日	工学部祭・工学部第2回オープンキャンパス（～7日）			
	10日	オープン・リサーチ・センター公開学術座談会			
	12日	編入学試験（A日程）合格発表／人間情報学研究所主催第13回講演会／榴ヶ岡高校第20回強歩大会			
	13日	ホームカミングデー（第8回同窓祭）			
	15日	TG十五日会			
	19日	今井奈緒子オルガン演奏会			
	20日	学徒仙台サテライトキャンパス公開講座			
22日	榴ヶ岡高校私学振興大会				
25日	法学政治学研究所主催第15回学術講演会				
27日	泉キャンパス祭（～28日）／教養学部オープンキャンパス				
31日	宗教改革記念礼拝（中学・高校、榴ヶ岡）				
11月	2日	六軒丁祭（～4日）／東北学院大学と多賀城市との連携協力に関する協定締結式（多賀城市役所）			
	3日	幼稚園造形展（～4日）			



# 東北学院121年沿革史

西暦(年号)	歴代役職者	東北学院に関わる時事
1886(明治19)年		ウィリアム・E・ホーイ仙台着任(1月)。押川方義、ウィリアム・E・ホーイの両名の協力により、キリスト教伝道者養成の目的をもって仙台市木町通に「仙台神学校」(5月)を開設。最初の生徒は6名であった。E・R・プルポー、M・B・オールドが来日(7月)、宮城女学校(現在の「宮城学院」)を創立(9月)
1887(明治20)年		東二番丁の本願寺別院跡を取得し、仙台教会と仙台神学校をここへ移す(5月)。
1888(明治21)年		D・B・シュネーダー夫妻仙台着任(1月)。オールド記念館落成(2月)。
1891(明治24)年		南町に新校舎が完成(9月)。校名を「東北学院」と改称し、神学生のみに限らず、広く生徒を募集し、普通科を設置。予科2年、本科4年、神学部3年とする。
1892(明治25)年	 押川方義	労働会創設(3月)。東北学院理事局を組織、初代院長に押川方義、理事局長にホーイ就任(8月)。東北学院開院式(11月)。
1895(明治28)年	 W・E・ホーイ	予科、本科を改組し、普通科5年、その上に専修部(文科・理科)2年とする。
1896(明治29)年		島崎春樹(藤村)、作文・英語教師として着任。
1898(明治31)年		理科専修部を廃止。
1900(明治33)年		第2代理事局長にD・B・シュネーダー就任(10月)。
1901(明治34)年	 D・B・シュネーダー	普通科長に笹尾糸太郎就任(4月)。普通科に制帽を制定。徽章TG章制定。第2代院長にD・B・シュネーダー就任。
1902(明治35)年		東北学院同窓会結成
1904(明治37)年	 笹尾糸太郎	全校を普通科(5年)と専門学校令による専門科(3年)とに分け、専門科に文学部と神学部とを置く。専門科長に出村悌三郎就任(4月)。
1905(明治38)年	 田中四郎	専門科を専門部、文学部を文科、神学部を神学科と改称。東二番丁に普通科校舎完成。専門部に角帽を制定。徽章は全校TG章を用いる。普通科長に田中四郎就任(9月)。
1906(明治39)年		普通科寄宿舎完成。
1908(明治41)年		「社団法人東北学院」を設置。創立記念日を5月15日と定める。
1910(明治43)年		校旗を制定。
1911(明治44)年		創立25周年記念式典挙行。
1915(大正4)年		普通科を中学部と改称(5月・生徒数357名)。中学部長は田中四郎氏。
1916(大正5)年		『東北院時報』創刊(1月)。南六軒丁に専門部校地取得。
1918(大正7)年		専門部を改組、神学科・文科・師範科・商科とする。





西暦(年号)	歴代役職者	東北学院に関わる時事
1919(大正8)年		仙台大火のため中学部校舎・寄宿舎全焼(3月)。仮校舎建築(9月)。
1920(大正9)年	 五十嵐正	中学部長に五十嵐正就任(1月)。
1921(大正10)年		創立35周年記念式典挙行。
1922(大正11)年		中学部校舎再建(6月)。〈東二番丁・通称赤レンガ校舎〉。中学部寄宿舎再建。
1923(大正12)年		東北学院教会設立(5月)。
1925(大正14)年		神学科を専門部より分離し。神学部(第1科・第2科)とする。専門部は文科、師範科、商科となる。
1926(大正15)年		南六軒丁に専門部校舎完成(現土樋本館)、9月より使用。創立40周年記念式ならびに専門部校舎落成式を挙行(10月)。
1928(昭和3)年		専門部3科とも予科を廃止、4年制とする。ハウスキーパー記念社交館完成(3月)。
1929(昭和4)年		専門部を高等学部と改称。神学部第2科を廃止、第1科を神学部本科と改称し、3年の予科を置く。「財団法人東北学院」を設置(8月)。
1930(昭和5)年		高等学部師範科に専攻科1年を置く。
1932(昭和7)年		高等学部は3学期制を2学期制に改める。ラーハウザー記念礼拝堂完成(3月)。労働会寄宿舎を廃止。中学部寄宿舎を廃止し、神学部寄宿舎をその跡に移す。
1933(昭和8)年		高等学部制帽を角帽より丸帽に改める。
1934(昭和9)年		神学部、南六軒丁ブラッドシユウ館に移る。
1935(昭和10)年	 出村悌三郎	高等学部長代理に津久井善四郎就任(4月)。
1936(昭和11)年	 E・H・ゾーグ	高等学部文科を文科第1部、師範科を文科第2部と改称。創立50周年記念式典を挙行。院長シュネーダーによる「我は福音を恥とせず」と題する説教を行う。第3代院長に出村悌三郎就任(5月)。旧労働会建物および敷地を売却。第3代理事長にゾーグ就任(6月)。
1937(昭和12)年		神学部廃止、日本神学校と合同(3月)。高等学部は3年制となる。高等学部長にゾーグ就任(4月)。
1938(昭和13)年	 田口泰輔	中学部長に田口泰輔就任(4月)。
1939(昭和14)年		中学部長に出村剛就任(4月)。
1940(昭和15)年		南町通旧神学部校舎および敷地を売却。東北学院維持会を組織。花淵浜高山に修養道場建築用地を取得。第4代理事長に出村悌三郎就任(10月)。
1941(昭和16)年	 小泉要太郎	高等学部長に出村剛、中学部長に小泉要太郎就任(4月)。
1942(昭和17)年		高等学部商科第2部および中学部第2部設置(ともに夜間)。





西暦(年号)	歴代役職者	東北学院に関わる時事
1943(昭和18)年		高等学部商科を高等商業部、中学部を中学校と改称。中学校長に出村悌三郎院長が兼務(4月)。
1944(昭和19)年	 杉山元治郎	航空工業専門学校長に宮城音五郎就任(4月)。航空工業専門学校設置、第5代理事長に杉山元治郎就任(6月)。
1945(昭和20)年	 出村剛	中学校長に出村悌三郎就任(4月)。航空工業専門学校を工業専門学校と改称(12月)。中学校校舎空襲により焼失。
1946(昭和21)年	 月浦利雄	高等商学部および同第2部を廃止(3月)。東北学院専門学校(英文科・経済科)および同第2部を設置、 <b>第4代院長に出村剛就任</b> 。中学校長に月浦利雄就任(4月)。専門学校長に出村剛就任(4月)。
1947(昭和22)年	 月浦利雄	工業専門学校廃止。新制中学校設置。専門学校校舎木造2階建4教室増築完成。第6代理事長に鈴木義男就任(7月)。
1948(昭和23)年	 鈴木義男	新制高等学校、同第2部を設置。月浦利雄同高等学校ならびに中学校長兼任(4月)。専門学校長に小田忠夫就任(4月)。
1949(昭和24)年	 鈴木義男	<b>東北学院専門学校から新制大学に昇格</b> 。東北学院大学文経学部(4年制、英文学科・経済学科)を設置。 <b>小田忠夫初代学長に就任</b> 。東九番丁寄宿舍完成。
1950(昭和25)年	 A・E・アンケニー	専門学校2部を東北学院短期大学部(2年制、英文科・経済科)と改称。 <b>第5代院長にA・E・アンケニー就任(3月)</b> 。
1951(昭和26)年	 小田忠夫	「学校法人東北学院」を設置。専門学校を廃止。 <b>第6代院長に小田忠夫就任</b> 。中高理科教室鉄筋コンクリート3階建完成。
1952(昭和27)年	 小田忠夫	短期大学部に法科を設置。
1953(昭和28)年	 五十嵐正躬	総合運動場を多賀城に開設。中学高等学校分離、中学校長に五十嵐正躬就任(4月)。シュネーダー記念東北学院図書館完成(10月)。
1954(昭和29)年	 五十嵐正躬	多賀城第2寄宿舍完成。
1955(昭和30)年		<b>創立70周年記念式典挙</b> 行。中学校校舎鉄筋コンクリート3階建9教室完成。『東北学院創立七十年写真誌』を刊行(5月)。在米同窓生、創立70周年記念として鐘を寄贈(12月)。蔵王にTGヒュッテ「栄光」完成。
1956(昭和31)年		中学・高等学校体育館完成(3月)。ウィリアム・E・ホーイ碑、出村悌三郎墓を北山墓地に建立(4月)。大学音楽館完成(10月)。
1958(昭和33)年		中学校赤レンガ校舎は都市計画により9教室を失う(4月)。中学・高等学校鉄筋コンクリート造4階建8教室完成(4月)。大学体育館「アセンブリー・ホール」完成(9月)。
1959(昭和34)年		中学高等学校一本化、中学校長に月浦利雄高等学校校長兼務(1月)。短期大学部を東北学院大学文経学部2部(英文学科・経済学科)に改組。 <b>高等学校榴ヶ岡校舎を開設</b> 。『東北学院七十年史』を刊行(7月)。大学研究棟鉄筋コンクリート造4階建完成(9月)。自然科学研究室青根分室を開設(10月)。
1960(昭和35)年		短期大学部を廃止(3月)。
1961(昭和36)年		文経学部英文学科に専攻科を設置。



西暦(年号)	歴代役職者	東北学院に関わる時事
1962(昭和37)年		多賀城町(現多賀城市)に東北学院大学工学部(機械工学科、電気工学科、応用物理学科)を設置。同校地に東北学院幼稚園を開設。初代幼稚園長に小田忠夫院長が就任(4月)。
1963(昭和38)年		押川記念館完成(2月)。工学部寄宿舍開設。大学オーディオ・ヴィジュアル・センター完成。野間記念剣道場完成(7月)。第7代理事長に杉山元治郎就任(9月)。
1964(昭和39)年	 <p>山根篤</p>	東北学院大学文経部1部・2部を文学部1部・同2部に改組。大学院文学研究科(修士課程)を設置。第8代理事長に山根篤就任(1月)。中学・高等学校地の一部を仙台市に市道として売却。
1965(昭和40)年		東北学院大学大学法学部(法律学科)および大学院経済学研究科(修士課程)を設置。赤レンガ校舎一部取壊し(1月)。宮城郡泉町市名坂字天神沢(現仙台市泉区天神沢)に10万坪の校地を取得(5月)。同窓会にTG15日会誕生(5月15日)。工学部4号館完成(10月)。中学校新校舎、中学・高等学校礼拝堂完成(11月)。大学土樋寄宿舍完成。
1966(昭和41)年		大学院文学研究科(博士課程)、工学研究科(修士課程・応用物理学専攻)を設置。創立80周年記念式典挙行。大学66年館完成(6月)。大学泉寄宿舍完成。青根セミナーハウス完成。
1967(昭和42)年		工学部に土木工学科を増設。中学・高等学校運動部室完成(3月)。大学67年館完成(5月)。中学・高等学校向山寄宿舍開設。
1968(昭和43)年		大学院経済学研究科(博士課程)、工学研究科(博士課程・応用物理学専攻)を設置。工学部5号館・6号館完成(3月)。中学・高等学校弓道場完成(3月)。大学新研究棟68年館完成(8月)。『東北学院大学学報』発刊(10月)。
1969(昭和44)年		工学部旭ヶ岡寄宿舍完成。第9代理事長に月浦利雄就任(3月)。
1970(昭和45)年		工学部校地に東北学院プール完成。
1971(昭和46)年	 <p>二関敬</p>	大学院工学研究科修士課程に、機械工学専攻および電気工学専攻を増設。倉石ヒュッテ完成。中学高等学校長に二関敬就任(9月)。榴ヶ岡校舎(高校)校長に五十嵐正躬就任(9月)。大学文団連棟焼失(9月)。
1972(昭和47)年		東北学院榴ヶ岡高等学校として独立(4月)。高山セミナーハウス完成(7月)。泉市市名坂(現仙台市泉区天神沢)に榴ヶ岡高等学校校舎が完成移転(8月)。榴ヶ岡高等学校体育館完成(12月)。
1973(昭和48)年	 <p>渡辺平八郎</p>	東北学院同窓会館完成(4月)。米国アーサイナス大学に第1回夏期留学生を派遣。中学・高等学校寄宿舍完成。幼稚園長に渡辺平八郎就任(7月)。
1974(昭和49)年		大学院工学研究科博士課程に機械工学専攻および電気工学専攻を増設。第10代理事長に小田忠夫就任(3月)。
1975(昭和50)年		大学院法学研究科(修士課程)を設置、大学67年館増築完成(6月)。
1976(昭和51)年		創立90周年記念式典挙行。
1977(昭和52)年		中学・高等学校長に田口誠一就任(4月)。榴ヶ岡高等学校長に小田忠夫院長兼任(4月)。
1978(昭和53)年	 <p>清水浩三</p>	大学90周年記念館完成(2月)。榴ヶ岡高等学校長に清水浩三就任(4月)。中学・高等学校赤レンガ後者、宮城県沖地震のため一部倒壊(6月)。TGヒュッテ焼失(8月)。ラーハウザー記念東北学院礼拝堂(土樋キャンパス礼拝堂)に新パイプオルガンを設置(11月)。



西暦(年号)	歴代役職者	東北学院に関わる時事
1979(昭和54)年		大学院法学研究科(博士課程)を設置。工学部計算センター完成(3月)。中学・高等学校赤レンガ校舎見送り式(3月)。大学78年館および部室棟完成(9月)。TGヒュッテ再建(10月)。東北学院展開催(十字屋仙台店、10月)。
1980(昭和55)年		中学・高等学校シュネーダー記念館完成(3月)。工学部機械工場および機械実験棟完成(3月)。榴ヶ岡高等学校礼拝堂および北校舎完成(8月)。泉校地総合運動場および管理センター完成(9月)。中学・高等学校文化部室完成(9月)。
1981(昭和56)年	 情野鉄雄	大学81年館完成(3月)。『東北学院報』発刊(4月)。情報処理センター設置。総合運動場プール完成(5月)。榴ヶ岡高等学校第1回海外研修(8月)。工学部体育館完成(10月)。
1982(昭和57)年	 情野鉄雄	米国アーサイナス大学と国際教育交流協定を締結。第7代院長・第2代大学長に情野鉄雄就任(4月)。第11代理事長に児玉省三就任。図書館工学部分館完成(11月)。
1983(昭和58)年	 児玉省三	高校2部廃止(3月)。榴ヶ岡高等学校校舎増築完成(3月)。工学部礼拝堂完成(10月)。
1984(昭和59)年		新シュネーダー記念図書館完成。高等学校第1回海外研修(7月)。
1985(昭和60)年	 宗方司	大学整備計画案(教養部泉校地移転など)公表(1月)。旧シュネーダー記念東北学院図書館を大学院校舎に改装(11月)。幼稚園新園舎完成(12月)。
1986(昭和61)年	 宗方司	創立100周年記念式典挙行。米国フランクリン・アンド・マーシャル大学と国際教育交流協定を締結。榴ヶ岡高等学校北校舎増築完成(3月)。
1987(昭和62)年	 半澤義巳	中学・高等学校長に宗方司就任(4月)。榴ヶ岡高等学校長に半澤義巳就任(4月)。中学・高等学校体育館武道館完成(12月)。
1988(昭和63)年	 橋本清	大学泉キャンパス完成、大学教養部を移転。榴ヶ岡高等学校礼拝堂増築完成(3月)。幼稚園長に橋本清就任(4月)。
1989(平成元年)	 新妻卓逸	泉キャンパスに教養学部(教養学科人間科学専攻・言語科学専攻・情報科学専攻)を開設。幼稚園長に新妻卓逸就任(4月)。『東北学院百年史』発刊(5月)。
1990(平成2)年	 新妻卓逸	大学院工学研究科土木工学専攻(修士課程)を設置。
1991(平成3)年	 武藤俊男	多賀城キャンパス1号館完成(3月)。榴ヶ岡高等学校部室棟完成(3月)。中学・高等学校長に武藤俊男就任(4月)。中学・高等学校社会科教室完成(7月)。
1992(平成4)年		大学院工学研究科土木工学専攻(博士課程)を設置。榴ヶ岡高等学校柔道・剣道場および校舎増築完成(1月)。第12代理事長に情野鉄雄就任(6月)。
1993(平成5)年		工学部2号館完成。中学・高等学校移転決定(3月)。
1994(平成6)年	 田口誠一	大学院人間情報学研究科人間情報学専攻(修士課程)を設置。
1995(平成7)年	 田口誠一	榴ヶ岡高等学校を男女共学制に移行。第8代院長に田口誠一就任。第3代大学長に倉松功就任(4月)。
1996(平成8)年		大学院人間情報学研究科人間情報学専攻(博士課程)を設置。榴ヶ岡高等学校家庭科実習棟完成(2月)。榴ヶ岡高等学校長に脇田睦生就任(4月)榴ヶ岡高等学校第1回ホームカミ





西暦(年号)	歴代役職者	東北学院に関わる時事
1997(平成9)年	 倉松功	ングデー実施。  大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻、アジア文化史専攻（修士課程）を設置。
1998(平成10)年	 倉松功	幼稚園長を田口誠一院長が兼務（4月）。韓国の平澤（ピョンテック）大学校と国際教育研究交流に関する協定締結（5月）。
1999(平成11)年	 脇田睦生	大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻、アジア文化史専攻（博士課程）を設置。 <b>大学設置50周年記念式典を挙</b> 行。 <b>第13代理事長に田口誠一就任</b> （4月）。
2000(平成12)年	 長谷川信夫	文学部英文学科、経済学部経済学科と商学科に昼夜開講制を導入。文学部2部英文学科と経済学部2部経済学科は募集停止。幼稚園長に長谷川信夫就任（4月）。土樋キャンパス8号館（押川記念ホール）・体育館献堂式（9月）。大学第1回ホームカミングデー（同窓祭）開催（10月）。大学シンボルマークを決定。仙台市宮城野区小鶴地区に中学・高等学校移転校地取得（3万1千坪）。  
2001(平成13)年	 出原莊三	文学部基督教学科をキリスト教学科に、経済学部商学科を経営学科に、教養学部教養学科言語科学専攻を言語文化専攻にそれぞれ改称（4月）、東北学院資料室開設（5月）。
2002(平成14)年	 出原莊三	工学部機械工学科を機械創成工学科に、電気工学科を電気情報工学科に、応用物理学科を物理情報工学科に、土木工学科を環境土木工学科にそれぞれ改称。大学院経済学研究科に経営学専攻を設置。中学・高等学校長に出原莊三就任。榴ヶ岡高等学校長に杉本勇就任（4月）。
2003(平成15)年	 杉本勇	<b>第14代理事長に赤澤昭三、第9代学院長および同窓会長に倉松功就任</b> （4月）。幼稚園長に長島慎二就任（4月）。東北学院同窓会100周年記念式典挙行（11月）。 
2004(平成16)年	 赤澤昭三	法科大学院・総合研究棟献堂式（2月）。 <b>第4代大学長に星宮望就任</b> （4月）。中学・高等学校長に松本芳哉就任（4月）。法科大学院法務研究科法実務専攻を設置（4月）。榴ヶ岡高等学校校舎増築（4月）。 
2005(平成17)年	 長島慎二	<b>中学・高等学校新校舎献堂式(仙台市宮城野区小鶴)</b> （1月）。東北学院同窓会館閉館（3月）。教養学部の改組、教養学科（人間科学専攻、言語文化専攻、情報科学専攻）を募集停止し、人間科学科、言語文化学科、情報科学科、地域構想学科を設置。文学部史学科を募集停止し、歴史学科を設置（4月）。 
2006(平成18)年	 松本芳哉	工学基礎教育センター献堂式（3月）。工学部の改組、電気情報工学科を従来のみとし、機械創成工学科を募集停止し、機械知能工学科を設置、物理情報工学科を募集停止し、電子工学科を設置および環境土木工学科を募集停止し環境建設工学科を設置（4月）。榴ヶ岡高等学校長に久能隆博就任（4月）。 <b>創立120周年記念式典挙</b> 行（5月）。 
2007(平成19)年	 久能隆博	中学・高等学校新寄宿舎献堂式、ハイテク・リサーチ・センター献堂式（3月）、中学・高等学校長に永井英司就任（4月）。 <b>創立121周年記念式典挙</b> 行、 <b>第10代学院長に星宮望就任</b> （4月）。多賀城市との連携協力協定締結式（11月）。



## 受贈資料一覧

2007年1月～2007年12月

日付	寄贈者	受贈資料
2007.1	桜美林学園	「J. F. オベリン」
2007.1	桜美林学園	朝陽門外の虹 崇貞女学校の人びと
2007.2	東北大学百年史編纂室	東北大学百年史 部局史四
2007.3	同志社大学 同志社社史資料センター	新島研究
2007.3	中央大学出版部	中央大学百年史 編纂の記録
2007.4	南山大学史料室	アルケイアー記録・情報・歴史一
2007.4	慶応義塾福沢研究センター	近代日本研究
2007.4	明治学院歴史資料館	明治学院歴史資料館資料集 第四集「精神的基督教」
2007.5	成蹊学園 総務部 広報課	成蹊学園史料館 資料集3
2007.6	法政大学図書館事務部総務課大学史担当	法政大学 大学史資料集 第28集
2007.6	京都大学大学文書館	「学友会関係資料」解説・目録
2007.6	慶応義塾大学出版会	語り継ぐ三田法学の伝統—慶応義塾大学法学部法律学科史—
2007.6	フェリス女学院	キダー公式書簡集
2007.6	九州大学大学文書館	九州大学大学史史料叢書 第15輯
2007.8	立命館百年史編纂室	立命館百年史 資料編二
2007.9	西南女学院宗教委員会	キリスト教教育年報 第4号
2007.9	武蔵学園記念室	新選物理学
2007.10	仙台市博物館	市史せんだい Vol. 17
2007.11	広島大学	広島大学五十年史 通史編
2007.11	同志社大学	鼓動 Doshisha Album 130th Anniversary
2007.11	学校法人 南山学園	HOMINIS DIGNITATI 南山学園創立75周年記念誌
2007.12	日本基督教団 山形六日町教会	天のみ民も地にある者も
2007.12	東北大学百年史編纂室	東北大学百年史—通史—
2007.12	熊本大学 五高記念館	第五高等学校

※主な受贈資料のみを掲載



# 東北学院資料室規程

## (設置および名称)

第1条 本院に、東北学院資料室(以下「資料室」という。)を置く。

## (目的)

第2条 資料室は、本院に関する歴史を将来に伝承するとともに、「建学の精神」に関連する資料を収集・保存・展示し、本院の発展に資することを目的とする。

## (事業)

第3条 資料室は、第2条の目的を達成するために、以下の事業を行う。

- 一 資料の収集、整理、および保存に関すること。
- 二 資料に関係する刊行物の編集および出版に関すること。
- 三 資料の展示および公開に関すること。
- 四 資料の閲覧および貸出に関すること。
- 五 資料に関係する情報の提供に関すること。
- 六 その他、必要と認められる事業に関すること。

## (運営委員会の設置)

第4条 資料室の事業を運営するため、東北学院資料室運営委員会(以下「運営委員会」という。)を設ける。

## (運営委員会の構成)

第5条 運営委員会は、次の者をもって構成する。

- 一 学院長
  - 二 総務担当副学長、宗教部長、総務部長、総務部次長、総務課長
  - 三 中学・高等学校副校長1名、榴ヶ岡高等学校副校長、中学・高等学校事務長、榴ヶ岡高等学校事務長、幼稚園教頭
  - 四 法人事務局長、庶務部長、庶務課長、広報課長
- 2 運営委員会は学院長が招集しその議長となる。
  - 3 運営委員会のもとに、必要に応じて実務委員会を設けることができる。実務委員は、運営委員会の議を経て委員長が任命する。
  - 4 運営委員会の事務は、広報課が行う。

## (資料室の管理・事務)

第6条 資料室の管理・事務は、広報課がこれを行う。

## (規則の改廃)

第7条 本規程の改廃は、運営委員会の議を経て理事会が行う。

## 附則

本規程は、2001(平成13)年4月1日から施行する。

## 附則

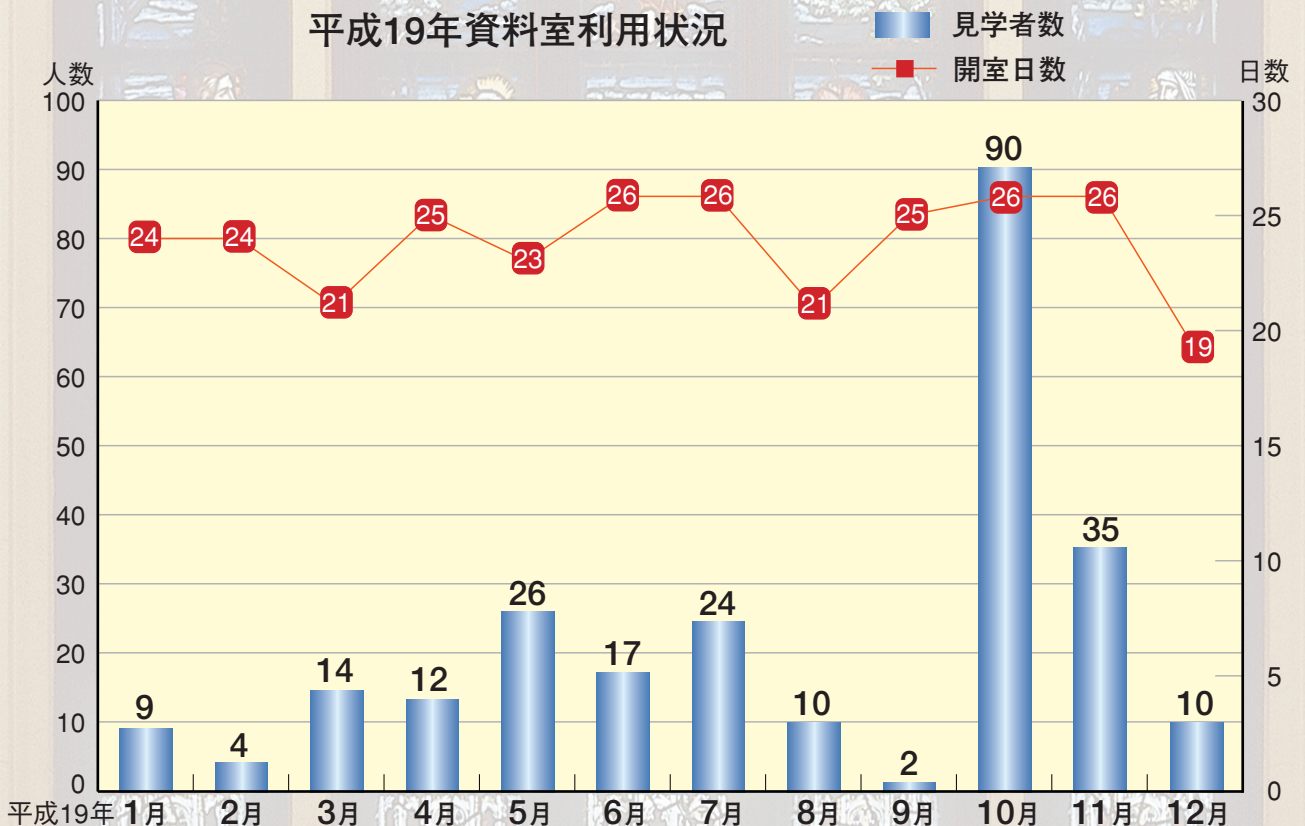
本規程は、2003(平成15)年4月1日から一部改正施行する。

# 平成19年資料室来室状況

2007（平成19）年

- 2月16日 アーサイナス大学の学生(2名)
- 3月20日 伝道者 吉田亀太郎のお孫さん(田村忠幸さん)ご夫妻
- 3月23日 新入生と保護者(2名)
- 3月26日 卒業生保護者(2名)
- 6月11日 宮城学院資料室関係者(3名)
- 7月11日 第6代理事長 鈴木義男のご親戚の方(3名)
- 7月31日 本学インターンシップの学生(10名)
- 8月3日 北海学園大学の学生7名と学院生(常任委員会)3名
- 10月10日 築館高等学校 生徒・先生(19名)
- 10月13日 ホームカミングデー来室者(約30名)
- 10月23日 泰日工業大学(タイ王国)学生・関係者(28名)
- 11月3日 同窓会 黒川支部の方々
- 12月3日 日本基督教団 東北地区センター J.メンセンディーク主事、米国合同教会・ディサイプル教会各教派の世界宣教部代表者の方々(3名)

平成19年資料室利用状況





## 東北学院資料室運営委員会

委員長	学院長	星宮	望
委員	副学長	関谷	登
	宗教部長	佐々木	哲夫
	総務部長	柴田	良孝
	総務部次長	鈴木	孝郎
	中学・高等学校副校長	渡辺	厚
	中学・高等学校事務長	佐藤	順
	榴ヶ岡高等学校副校長	湯本	良次
	榴ヶ岡高等学校事務長	佐藤	範明
	幼稚園教頭	阿部	正子
	法人事務局長	大童	敬郎
	庶務部長	高橋	清昭
	庶務課長	日野	哲
	広報課長	折原	清

事務局 庶務部広報課



### 資料室利用案内

東北学院資料室は、広く一般の方々にも開放しております。

#### 開室時間

#### 授業期間中

月～金 10:30～16:00

但し、昼休み時間(12:40～13:40まで)を除きます。

土 10:30～12:00

(祝祭日は閉室いたします。)

#### 長期休暇(春休み・夏休み・冬休み)中

月～金 10:00～15:30

但し、昼休み時間(12:40～13:40まで)を除きます。

(土・祝祭日は閉室いたします。)



発行日 2007(平成19)年12月31日

編集 東北学院資料室運営委員会

発行 学校法人 東北学院

〒980-8511

仙台市青葉区土樋一丁目3番1号

TEL.022-264-6423 FAX.022-264-6478

<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/>

印刷 東北堂印刷株式会社